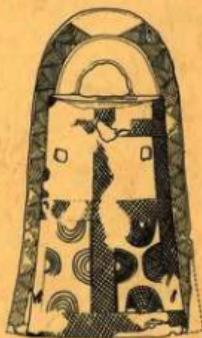


島根県簸川郡斐川町神庭所在

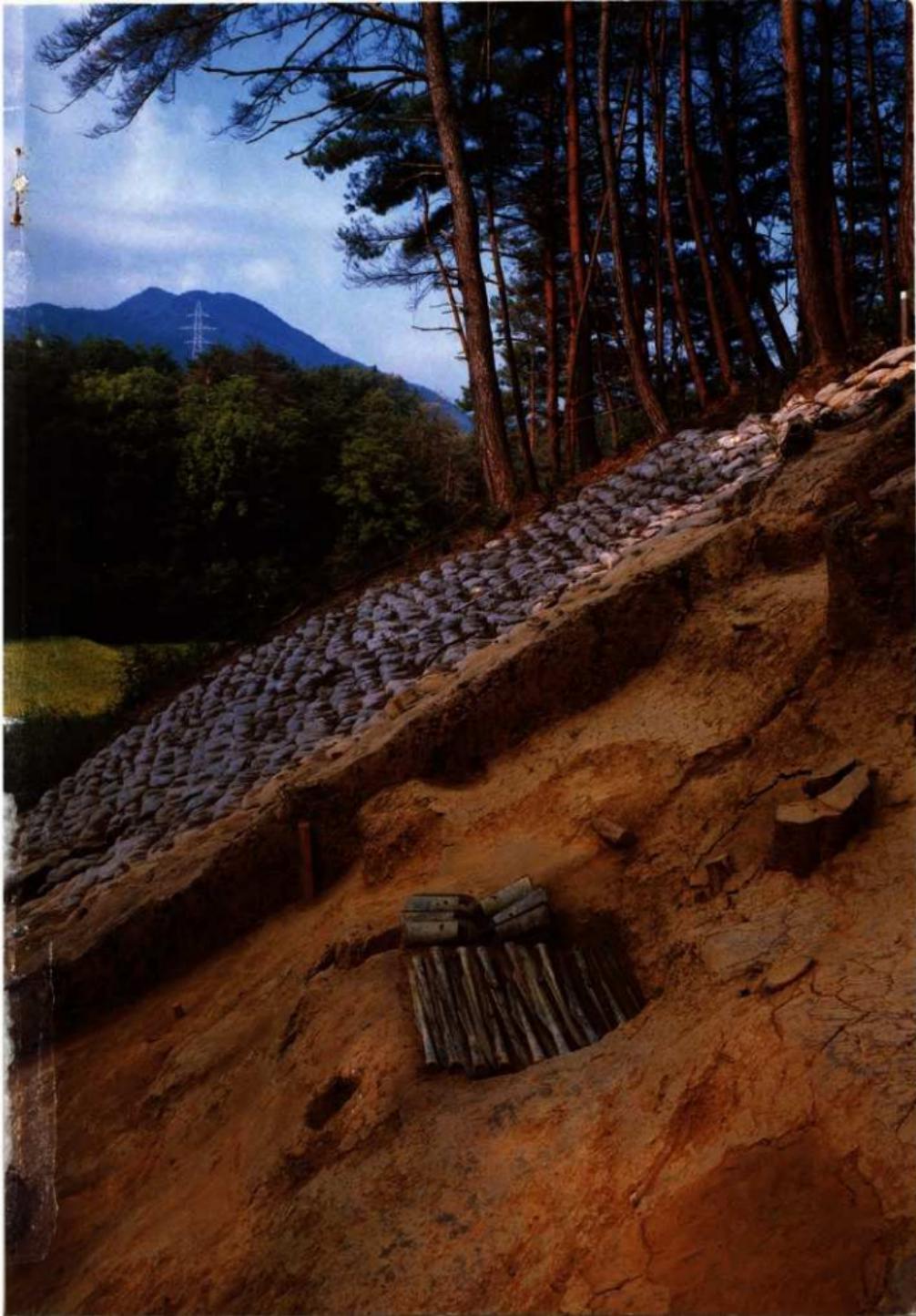
荒神谷遺跡発掘調査概報(2)

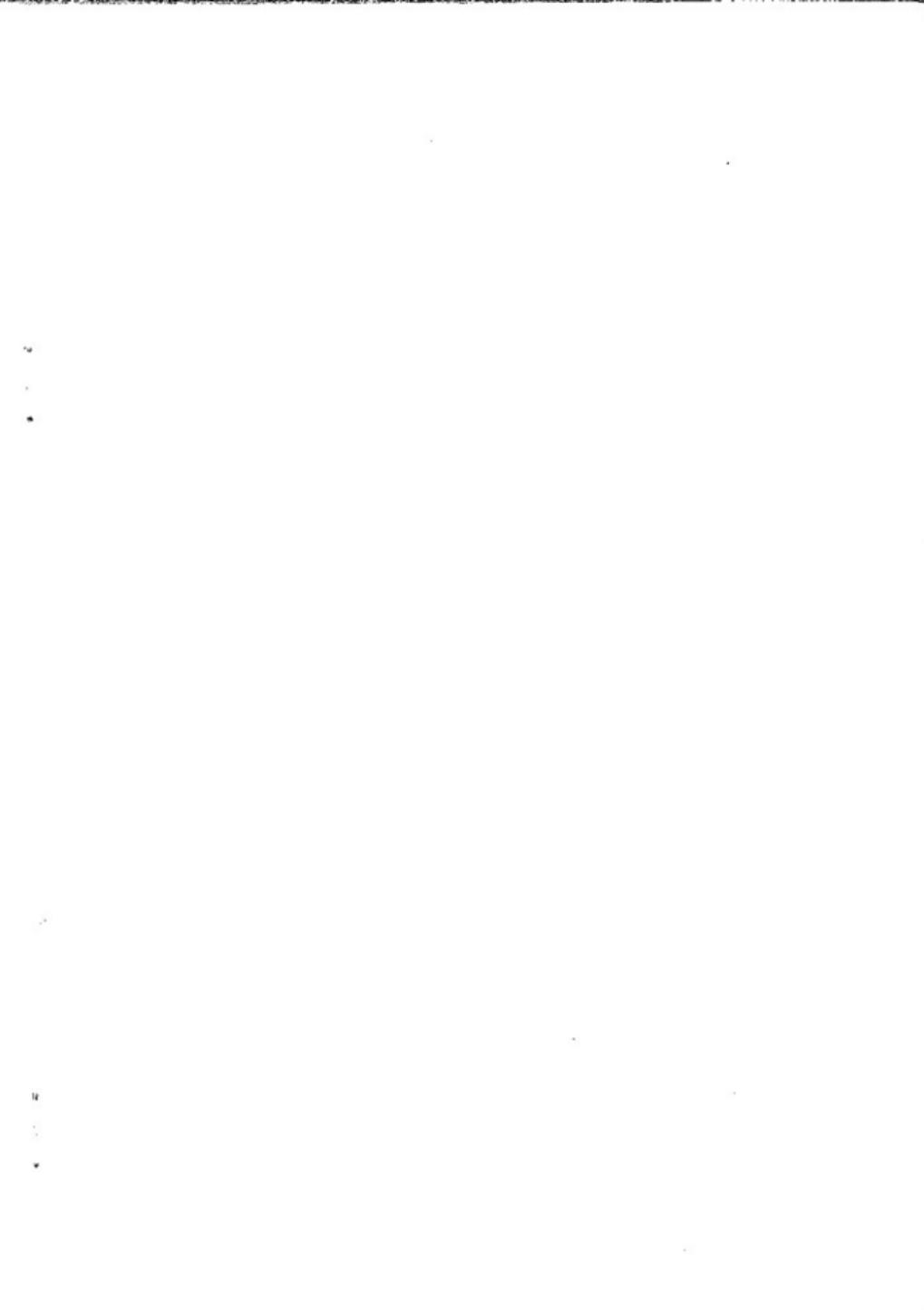
— 銅鐸・銅矛出土地 —



3月

委員会





序

昭和59年夏、荒神谷遺跡の発掘調査で 358本という大量の銅剣が発見されました。これまでの全国の出土総数を上回る驚異的な数量で、全国から注目されました。

それから 1 年後の昭和60年夏の調査で予想だにしなかった銅鐸・銅矛が発見され、荒神谷遺跡は、再び全国の熱い視線を集めることになりました。これらの発見は出雲古代史だけではなく、日本古代史を考える上で極めて貴重な発見であります。

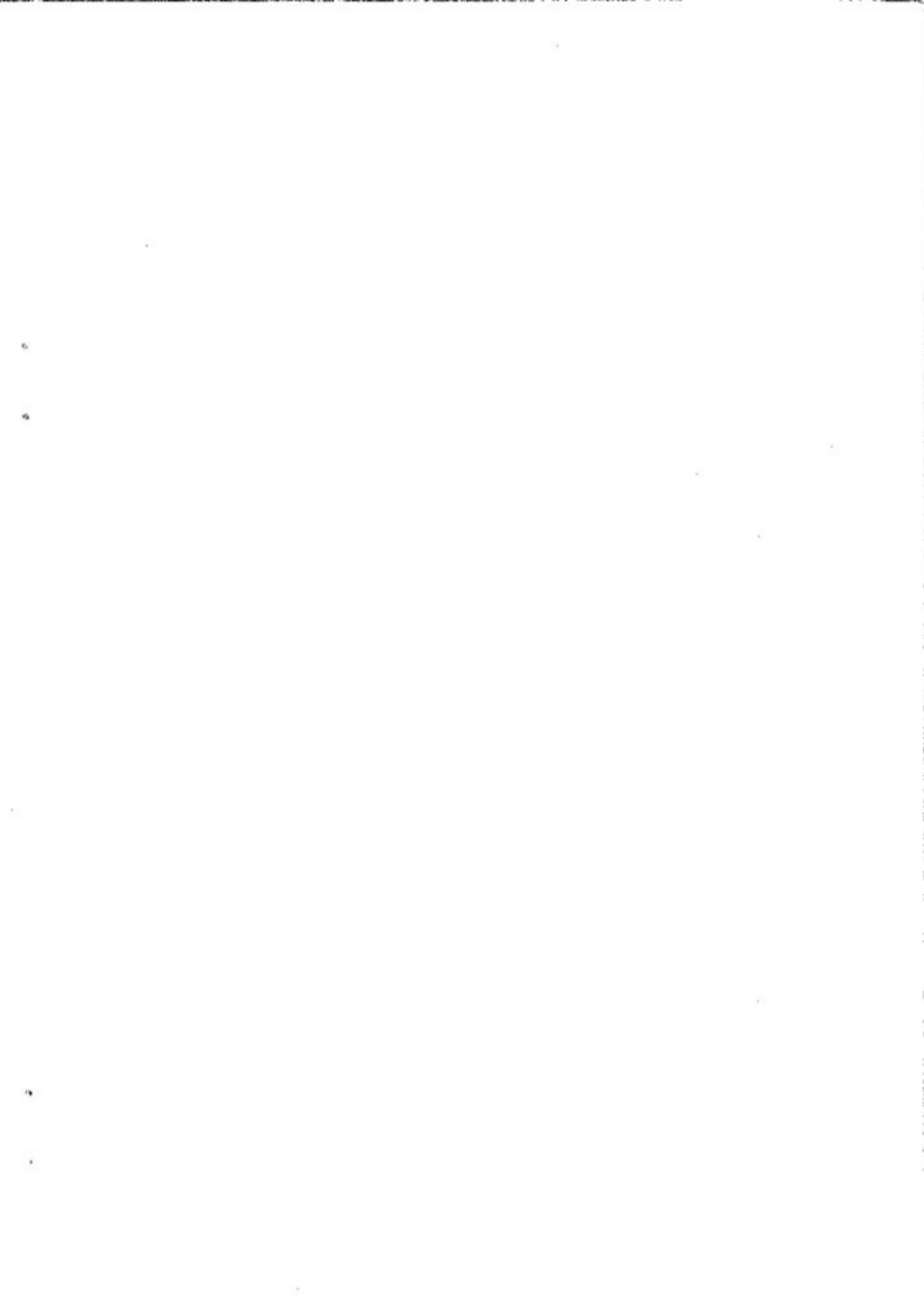
私達は、この発掘調査の成果を皆様方に報告し、先人の遺産を正しく後世へ伝えたいと願うものであります。これを契機に埋蔵文化財に対する一層のご理解を深めていただければ望外の喜びでございます。

最後に、調査にあたってご指導、ご協力を賜わりました文化庁、奈良国立文化財研究所、出雲農林事務所、斐川町をはじめ関係各位に厚く御礼申しあげます。

昭和61年 3月

島根県教育委員会教育長

栗 栖 理 知



目 次

第1章 調査に至る経緯と経過.....	1
第2章 位置と歴史的環境.....	3
第3章 調査の概要.....	5
1 青銅器探査.....	5
2 埋納坑の調査	6
3 谷底部の調査	8
第4章 銅鐸と銅矛.....	10
1 銅鐸	10
2 銅矛	12
第5章 まとめ.....	17

挿図目次

第1図 銅剣の出土状況.....	1
第2図 地下レーダーによる探査風景.....	2
第3図 荒神谷遺跡の位置.....	3
第4図 遺跡の位置と周辺の遺跡.....	4・5
第5図 EM38による探査風景.....	6
第6図 1・2号鐸周辺の黒色土.....	7
第7図 谷底部土層堆積状況.....	9
第8図 銅鐸の鉢.....	11
第9図 4号矛の研ぎ分け.....	13
第10図 節帯上端の位置.....	16
第11図 銅矛の計測位置.....	16
第12図 銅矛節帯部分.....	20

表 目 次

表 1 銅鐸計測表.....	16・17
表 2 銅矛計測表.....	16・17

図 版 目 次

卷頭図版	銅鐸・銅矛出土状況	図版18-2 埋納坑埋土堆積状況
図版 1	荒神谷遺跡地形測量図	図版19-1 銅鐸・銅矛出土状況
図版 2	埋納坑埋土検出状況	図版19-2 銅鐸・銅矛出土状況
図版 3	埋納坑埋土堆積状況	図版20-1 銅鐸・銅矛取り上げ後の状況
図版 4	埋納坑および銅鐸・銅矛出土状況	図版20-2 埋納坑下部の粘質土堆積状況
図版 5	1号銅鐸実測図	図版21 銅剣埋納坑と銅鐸・銅矛埋納坑の全景
図版 6	2号銅鐸実測図	
図版 7	3号銅鐸実測図	図版22-1 1号銅鐸
図版 8	4号銅鐸実測図	図版22-2 1号銅鐸 A面
図版 9	5号銅鐸実測図	図版22-3 1号銅鐸 B面
図版10	6号銅鐸実測図	図版23-1 2号銅鐸
図版11	1・2・3・4号銅矛実測図	図版23-2 3号銅鐸
図版12	5・6・7・8号銅矛実測図	図版24-1 5号銅鐸
図版13	9・10・11・12号銅矛実測図	図版24-2 5号銅鐸舞部
図版14	13・14・15・16号銅矛実測図	図版24-3 5号銅鐸底部
図版15-1	荒神谷遺跡遠景	図版24-4 5号銅鐸B面
図版15-2	荒神谷遺跡近景	図版25-1 4号銅鐸
図版16-1	昭和60年度発掘調査前の状況	図版25-2 6号銅鐸
図版16-2	昭和60年度発掘調査後の状況	図版26 1・2・3・4号銅矛
図版17-1	銅鐸出土時の状況	図版27 5・6・7・8号銅矛
図版17-2	埋土検出状況	図版28 9・10・11・12号銅矛
図版18-1	埋土調査時ピット検出状況	図版29 13・14・15・16号銅矛

例　　言

1. 本書は、島根県教育委員会が昭和60年度国庫補助事業として実施した島根県簸川郡斐川町荒神谷遺跡発掘調査の概報である。

2. 調査組織は次のとおりである。

調査指導 山本清(島根県文化財保護審議会委員)、町田章(同)、池田満雄(同)、田中義昭(島根大学法文学部教授)、近藤秀一(山口大学人文学部教授)、佐原真(奈良国立文化財研究所)、沢田正昭(同)、伊東太作(同)、西村康(同)、岩永省三(同)、秋山隆保(同)、江本義理(東京国立文化財研究所)、河原純之(文化庁記念物課)、伊藤晴明(島根大学理学部教授)、時枝克安(同助教授)

事務局 美多定秀(文化課長)、水瀬忠治(同課長補佐)、矢内高太郎(同文化係長)、吉川広(同主事)、永塚太郎(同埋蔵文化財第一係長)、田根裕美子(同嘱託)、山根徳久(財務課主事)

調査員 遠岡法暉(文化課長補佐)、宮沢明久(同文化財保護主事)、松本岩雄(同主事)、西尾克己(同)、足立克己(同)、三宅博士(島根県教育文化財刊行委員主事)、柳浦俊一(同文化財主事)、宍道年弘(斐川町教育委員会主事)

調査協力 島根県出雲農林事務所、斐川町、斐川町教育委員会、斐川町西谷自治会、金集基、宮木徳昭、石高歩、荒木利幸

調査参加 原俊二(国学院大学学生)、林健亮(別府大学学生)、大谷亮二(島根大学学生)、高橋進(同)、磯田由紀子(同)、古瀬岩雄、大蛇裕貴、黒田幸一、昌子流市、高木福一、長谷川恒太郎、丹子健二郎、村上シゲリ、村上光恵、岡アヤコ、岡弘子、堀江五十鈴、横山知子、湘田明子、村上隆、渡辺泰子

なお上記のほかに下記の方々から指導助言を得た。

石野博信、井上洋一、遠寺佐太夫、小田富士雄、乙益重隆、勝部昭、勝部明生、小林竹雄、七田忠昭、高倉洋彰、武末純一、難波洋三、原徹夫、春成秀爾、藤口健二、丸山康晴、三木文雄、三輪嘉六、渡辺貞幸、柳田康雄
(順不同)

3. 発掘調査に際しては、土地所有者木村吉正、村上正義尚氏から多くの御協力をいたいたほか、村上シゲリ、飯塚忠、岡信夫、岡藤勇、船島正司、福島忠昭、勝部健造の各氏をはじめ地元の方々には終始多大な協力を得た。記して謝意を表したい。

4. 発掘調査に際しては、下記のとおり各分野に依頼して行なった。

考古地磁気測定—島根大学理学部伊藤晴明、時枝克安。写真測量—奈良国立文化財研究所伊東太作、岩永省三。遺物取り上げ・保存処理一同 沢田正昭、秋山隆保。地形図作成・空中写真撮影—ワールド航測コンサルタント㈱。青銅器探査—応用地質㈱。写真撮影—井上喜弘、井上治大。記録ビデオ製作—山陰ビデオクラフト社。埋戻工事—福島組。見学用足場工事—木村木材㈱

5. 掘団中の方位は国土調査法による第II座標系X軸の方向を示す。したがって磁北より7度03分、真北より0度23分東の方向を示している。

6. 本書に掲載した遺跡の分布図は建設省国土地理院発行のものを複製したものである。

7. 本書の執筆、編集は、宮沢、柳浦、宍道が遠岡、松本の協力を得て行なった。



第1章 調査に至る経緯と経過

荒神谷遺跡は、姫川南地区広域営農団地農道整備事業に伴う事前の分布調査で、谷水田から須恵器が採集されたことにより遺跡として確認された。昭和59年7月11日に遺跡の性格と範囲を知るために20個の試掘溝を設けて試掘調査を開始した。翌7月12日その1個から銅剣が発見され、8月30日には、これまでの国内での銅剣出土総数を上回る358本という驚異的な出土数が確認された（第1図）。

この調査では、斜面を削って設けられた2段からなるテラス状遺構が確認され、その下段のテラスに銅剣埋納坑があった。しかしこの埋納坑に4列に並べられた銅剣の各列両端部は斜面下方へずり落ちそうな状態であった。また4列のうち西端のA列だけが他の3列に比して並べられた本数が少なかった。

これらのことから本年度は埋納坑下方の谷底部について、ずり落ちた銅剣の有無や関連する遺構の存在を確認するため、発掘調査を継続することにした。

昭和60年5月に土地所有者と立木伐採についての交渉を行ない、6月には周辺の地形測量を始めた。測量及び図化作業はワールド航測コンサルタント㈱に委託して、平板測量で図化縮尺100分の1、25cm等高線という仕様で詳細な地形図を作成した。範囲は銅剣埋納地の丘陵と南側丘陵及びその間の谷底部分である。

この地形図をもとに7月には、西村旗奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター発掘技術研究室長の指導のもと、応用地質㈱により埋納地周辺における青銅器及び関連遺構の探査を実施した（第2図）。

発掘調査にあたっては銅剣埋納地下方の谷底部に残された昭和59年度の測量基準点をそのまま用いて調査区設定用の方眼を組んだ。この基準点をN O E Oとして北へ向かって2m間隔にN 1・N 2・・・・・、南へS 1・S 2・・・・・、東へE 1・E 2・・・・・、西へW 1・W 2・・・・・と呼称した。そしてこの2m×2mの範囲を1つの調査グリッドとし、北西隅の交差点名をもってグリッド名を呼ぶことにした。

発掘調査はまず銅剣埋納にかかる遺構の存在が予想された谷底部について実施した。

前年度調査との土層の関係を確認するため、ま



第1図 銅剣の出土状況(昭和59年度調査)



第2図 地下レーダーによる探査風景

ずN1W1・N1E0・N1E1グリッドを発掘した。現地表下にかなりの流土の堆積があることや、その下にはほぼ全面に炭化物層があることなどが判明した。続いて谷底部の土層及び旧地形を観察するためN0E0・S1E0・S2E0・S3E0グリッドを発掘した。N1W1・S1E0グリッドでは炭化物層や焼土が検出できたので、島根大学理学部伊藤晴明教授と時枝克安助教授に熱残留磁気測定を依頼した。

これと並行して、先に実施した青銅器及び遺構探査データの解析作業も進められた。とくに昨年度調査区の東側に隣接する地点に異常反応が指摘されたため、ここにも調査区を設定して発掘を始めた。7月19日現地表下約50cmのところで銅鐸が2個発見され、事前の探査結果を実証することになった。

この出土地を中心に直交する土層観察用ベルトを設定して、埋土を検出する作業から始め、埋納坑の調査へと進めた。また銅鐸出土地との関係やN0E0周辺で検出された炭化物層の拡がりを調べるため、銅鐸出土地下方の谷底部分にもN0E3・S1E3グリッドを設定して発掘した。

銅鐸埋納部の調査が進むと8月16日には銅矛が見つかり、8月21日には最終的に銅鐸6個と銅矛16本を確認した。

銅鐸・銅矛出土状態の写真測量は奈良国立文化財研究所伊東太作、岩永省三両氏により行なわれたが図化作業は次年度に実施することになった。銅鐸・銅矛は昨年度出土した銅劍に比べ残存状態は比較的良好であったが、銅鐸の裾部や銅矛の刃部などに脆弱な部位が見受けられたため、銅劍と同様アクリル樹脂を塗布して硬化させ取り上げた。作業は奈良国立文化財研究所秋山隆保氏の指導を受けて行なった。

取り上げが終了した9月2日からは埋納坑下部の調査を進め、9月14日に現地調査を終えた。その後10月末には銅劍埋納地と同様に麻の土のうで埋め戻しを行ない、12月には上空から気球による写真撮影を行なった。また調査の状況については終始ビデオテープに収録し資料として残した。

この間、銅鐸・銅矛は10月23日から翌年1月23日まで奈良国立文化財研究所において、脱塩・樹脂含浸という方法で保存処理が行なわれた。

註1、島根県教育委員会『荒神谷遺跡銅劍発掘調査概報』1985年 なお、筆文中で銅矛の最高出土本数を「春日市小倉の27口」としたのは八女市藤田天神浦の18本の誤りであったので、ここで訂正しておく。

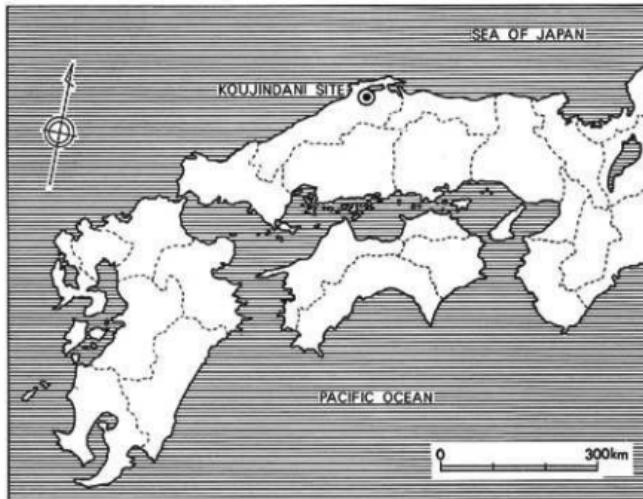
第2章 位置と歴史的環境

荒神谷遺跡は島根県簸川郡斐川町大字神庭812番地ほかに所在する(第3図)。斐川町役場から南へ約800m行くと「西谷」と呼ばれる幅約100mの狭い谷に至る。さらに南へ約2km進むと、最奥部に西谷池がある。その池の東へ目をやると水田の向こうに小さな枝尾根が幾筋か延び、正面の谷を少し登っていくと南向きの斜面に出土地がある(図版1・15)。ここは通称「畑ノ奥」と呼ばれるが、遺跡名は近くの老木三本に「荒神さん」(三宝荒神)が祀られていることによる。

遺跡の北に並ぶ簸川平野一帯は古來斐伊川によって形成された沖積平野である。少なくとも奈良時代には大部分は湖底であったと考えられ、現在のように広く耕地として利用されるようになつたのは寛永年間(1630年代)以降である。したがつて原始、古代の遺跡が多く存在するのは簸川平野の南部の丘陵地帯にかけてである。

以下、荒神谷遺跡周辺の遺跡について概観してみる(第4図)。これまで旧石器時代の遺跡は発見されていない。縄文時代も從来は上江平野丘陵、上学頭永徳寺、三経波知神社周辺の採集品で石鏃や石槍、石斧などが知られるにすぎなかった。しかし、昭和59年、60年に発掘が行なわれた結果遺跡において縄文時代早期末から前期初頭の刺突文土器、条痕土器や石器が発見され、この遺跡は周辺では最古の遺跡であることがわかった。

弥生時代の遺跡をみると、昭和37年工事中に弥生時代後期から古墳時代前期の土器が多量に出土



第3図
荒神谷遺跡の位置

した斐伊川鉄橋遺跡以外に荒神谷遺跡の周辺では今のところ弥生時代の土器は発見されていない。一方、出雲平野に目を転じると出雲市矢野遺跡、天神遺跡、多聞院遺跡などでは弥生時代から古墳時代前半にかけての土器が出土しており集落が営まれていた可能性がある。また斐伊川左岸にある西谷丘陵遺跡は弥生時代後期から古墳時代前期の墳墓群で、とくに四隅突出型という特異な墳墓が6基もあり注目されている。

古墳時代前期には、景初三年銘三角縁神獸鏡が出土したことによく知られている斐伊川中流域の加茂町神原神社古墳が築かれる。中期にはいると神庭岩船山古墳(前方後円墳、全長57m)や東原古墳、小丸子山古墳が鞍川平野の縁辺部に築かれる。また、中期から後期中頃にかけては、丘陵上に小規模な古墳がいくつも築かれる。結古墳群、城山古墳群、岩野原古墳群など多くは、一辺(径)10m内外の古墳が10~30基群集する形で存在する。なかでも結11号墳の内部主体は礫椁で、山陰地方では初めての蛇形状鉄劍が出土した。これは全国でも30数本しか出土していない。後期古墳は丘陵の裾部にあり、横穴式石室や横穴墓が採用される。当方で特徴的な石棺式石室を有するものに出西小丸古墳群、高野古墳群、武部西古墳群などがあり、石室は小さく各室及び天井は1~数枚の切石を使用しているのが特徴である。一方、横穴墓は出西地域、上直江地域、上学頭地域に集中して2・3基~数10基単位で築かれている。

これらの遺跡のほか、丘陵の縁辺部には古墳時代から奈良時代にかけての遺物が散在し、集落が営まれていた可能性もある。

このように現在のところ遺跡の周辺では、弥生時代に関する遺跡は不明であるが、古墳時代には多くの古墳が知られている。

なお、このあたりは『出雲國風土記』(733年)や『出雲國大稅賦給歴名帳』(739年)に記す「出雲郡健部郷」とされ、今でも西隣の谷は「武部」と呼ばれ、「建部」姓を多く残す土地である。また『出雲國風土記』に見える出雲郡の「神名火山」に比定されている仏経山(標高366m)は、遺跡の南西方向に仰ぎ見る位置に残っている。^{註4}

註1. 斐伊川町教育委員会『斐伊川町史』1972年

註2. 1984年度斐伊川町教育委員会の調査による。

註3. 烏根県教育委員会『出雲・土壤治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』1980年

斐伊川町教育委員会『平野遺跡群発掘調査報告書』II 1984年

註4. 加藤義成『修訂出雲國風土記考究』1981年



1. 親谷遺跡
2. 草原古墳
3. 大倉横穴墓群
4. 小丸子山古墳
5. 神庭岩山古墳
6. 神庭丘陵古墳跡
7. 西谷道跡
8. 西谷丘陵古墳群
9. 三経道路
10. 武部西古墳
11. 古殿古墳群
12. 西古墳群
13. 石橋古墳群
14. 結古墳群
15. 結遺跡
16. 貢船古墳
17. 結西I遺跡
18. 結西II遺跡
19. 眼切遺跡
20. 岩野原古墳群
21. 平野横穴墓群
22. 城山古墳群
23. 長者原古墳群
24. 後谷古墳群
25. 出小山古墳群
26. 山の裏横穴墓群
27. 愛伊川遺跡遺跡
28. 西谷丘陵古墳
29. 大念寺古墳群
30. 瑠璃山古墳
31. 長者原廻寺
32. 上塙治横穴墓群
33. 上塙治梁山古墳
34. 神門寺廻寺
35. 地藏山古墳
36. 高野古墳群
37. 布子谷古墳
38. 神原神山古墳
39. 大寺古墳

第4図 道路の位置と周辺の遺跡

第3章 調査の概要

1 青銅器探査

地下の埋設物を探したり、地層の変化を調査する地下レーダーなどの機器を利用して、青銅器およびその埋納に関連する遺構の存否を知るために探査を実施した。探査は、奈良国立文化財研究所西村康氏の指導を得ながら、これまでに全国各地の遺跡で埋蔵文化財探査を多数手懸けている応用地質学に委託して行なった。

使用機器は次のものである。

①地下レーダー

電磁波を利用した浅層地下探査システムで地表に置いたアンテナから電磁波パルスを放射し、地下の境界面で生じた反射波を受信アンテナで捕える。そしてこの受信波を増幅し各種の波形処理を施して波形記録として描くものである。浅い地盤での土質調査、地下空洞調査、埋設物調査などが主な用途で最近では考古学的調査にも使用されている。

②EM38（浅部電磁法探査装置）

地盤の電磁誘導現象を利用した探査法で、地盤の電気の流れやすさ(導電率)あるいはその逆数(比抵抗)を測定し、地下の内部構造を地下レーダーと同様、非破壊的に探査する方法である。

これは今回初めてカナダから輸入された機器で、一番よく成果を表わしたと考えられる。

③メタルロケーター（金属探知器）

地下などに埋設された金属物質を電磁誘導現象を利用して検出する方法である。これはハンディタイプであるため、測定が容易であるが散在する金属物質にすべて反応してしまうという難点があった。

探査を開始する前には、地形図や昭和59年度調査結果などを資料にして、探査機器で測定するための測線の設定、各探査機器の有効な使用方法について検討した。まず対象範囲を、銅剣埋納地のある丘陵南側斜面と尾根および丘陵先端部、埋納地南側丘陵の北側斜面と尾根および丘陵先端部、それに両丘陵に挟まれる谷底の約2,500 m²に定め、測線を1 m間隔に設定した。

各機器の使用方法や立木などの障害物、地形などを考えて、次のとおり実施することにした。

①地下レーダーにより1 m間隔の測線に沿って測定する。

②これと並行してEM38により1 m間隔の測線を1 mおきに測定していく。

③メタルロケーターは、現状では昭和59年度調査時の釘、番線、空缶などの金属製品が散在してお



第5図 EM38による探査風景

た地点から銅鐸が発見されたわけである。

銅鐸発見後、埋納状況を事前に詳細に把握するため、西村康氏の御配慮と応用地質㈱の御好意によって再度より詳細な測定を実施することができた。

前回は1m間隔での測定であったため、異常反応を範囲で示すことができなかつたので、今回はEM38を用いて20cm間隔で測定するとともにメタルロケーターでも探査した(第5図)。

銅鐸発見地周辺を測定、探査した結果、東西約1.4m、南北約1.8mの範囲で土層の変化が指摘され、そのうち銅鐸は東西約1.0m、南北約0.5mの範囲に存在するのではないかと指摘された。ただし斜面での測定であるため、それぞれに誤差が生ずることであった。

すなわち前者が埋納坑または埋土の範囲であり、後者は銅鐸・銅矛の埋納範囲を示したものであつたことが発掘調査により明らかになった。

2 埋納坑の調査

埋納坑と埋土の状態(図版2・3・17)　銅鐸・銅矛は標高約28mの丘陵の南斜面に設けられた埋納坑内に納められていた。銅鐸は埋納坑中央に、銅矛は東側に埋納され、西側では遺物は出土しなかつた。便宜上、銅鐸は南列(谷側)西から1・2・3号鐸、北列(山側)西から4・5・6号鐸とし、銅矛は南側から北に向かって1・2・3・・・14・15・16号矛とする。埋納坑は埋土によって覆われており、発掘前の表面観察でもわずかながら高まりが観察された(図版17-1)。しかしながら銅劍出土地同様、石など青銅器埋納の明瞭な標識となるべきものは認められなかつた。

銅鐸・銅矛を覆った埋土は淡黄色土(第1層)、暗黄褐色土(第2層)を約0.3m除去した段階で検出された(図版2・17-2)。これは流出した部分もあると思われるが埋納坑よりやや広い範囲で盛られていた。その範囲は東西約2.4m、南北約2m、坑底からの厚さ約0.4mを測り、外観はわずかに高まりを持つ小マウンド状を呈している。埋土は基本的に銅鐸・銅矛直上に明黄色粘質土(第18層)、その上に暗黄褐色土(第17層)、さらに茶色土(第11層)、茶褐色土(第10層)の順に堆積してい

た(図版3・18-2)。銅鐸・銅矛直上の明黄色粘質土がついでに青銅器を覆っていたのに比べ、それより上層の土はやや雜に盛られているように感じられた。また、銅鐸のうち南列西側の2個(1号鐸、2号鐸)周辺には炭化物を多く含む黒色土層が観察された(第6図)。また銅鐸・銅矛直上及び直下の粘質土はわずかに黒く変色していたが、これは青銅器の影響による変色と思われる。今回の発掘では青銅器を布や木箱などで囲ったような痕跡はみられなかった。

埋納坑は東西約2.1m、南北約1.5m、北壁の高さ約0.6~0.7mを測り、平面形は不整だ円形を呈している(図版4・19)。埋納坑は斜面を掘削加工して段を作り、さらに谷側(南側)は淡黄色粘質土(第20層)を厚さ約20cm貼って坑底の面積を拡張している。この淡黄色粘質土の範囲は南列銅鐸(1~3号鐸)の鉢付近及び南から8番目の銅矛(8号矛)付近まで貼られていた。坑底は銅矛が置かれていたところは東西約0.9m、南北約0.7mにわたってほぼ水平に整形されていたが、銅鐸が置かれていたところはやや傾斜していた(図版3・20)。

壁面は全体に約50度の緩い角度で掘りこまれているが、銅矛北側(山側)ではさらに下部が約80度の急角度に掘りこまれていた。この急角度に掘りこまれた壁は銅矛の周囲を「コ」の字形に囲っており、前述のとおりこの部分の坑底はほぼ水平に整形されていた。

埋納坑ではピットが5個検出された(図版4・18-1)。いずれも径10~20cmの小形のピットで、平面形は不整円形または不整だ円形を呈す。P1・P2は埋土上面で検出したが、P3・P4は坑底の第20層を除去中に検出した。P5については1号鐸発見当初に埋土上部を一部掘り過ぎたため、どの層から掘り込まれたかは不明であるが発見時には第20層上面で検出された。またP4内では東に偏って径約10cmの柱状の灰黒色土層が検出された。P1~3・5内には灰黒色土が堆積していた。これらはいずれも鉛直ではなく、谷側に傾いた状態で検出された。なお、第20層除去中にP2に接して径約15cmの範囲でレンズ状に灰黒色土が堆積していた。平面形は不整円形のピットのように思われたが、非常に浅くピットとは判断しかねた。

青銅器の出土状況(図版4・19) 銅鐸・銅矛は埋納坑東側に銅矛、中央に銅鐸という配列で坑底に直接置かれていたが、西よりでは遺物は出土しなかった。

銅矛については、1号矛は鋒部を西に2号矛は鋒部を東にというように袋部と鋒部を交互にして置かれていた。各銅矛の長さが様々であるため両端は不揃いであるが、東端に比べ西端は比較的揃っている。いずれも刃部は谷側に傾いた状態で出土したが、谷側(南側)に置かれたもの(1・2・



第6図 1・2号鐸周辺の黒色土

3号矛)ほど傾きは著しく、埋納坑北側に近いもの(15・16号矛)は垂直に近い状態で出土した。出土状態から考えると、銅矛は埋納当初は刀を垂直に立てて置かれていたが、埋納後土圧などによって傾いたものと思われる。なお、6・7・12・14・16号矛は耳を上に向けて置かれていたが、他は耳を下に向けて置かれていた。

銅鐸は鐸身が銅矛に直交するようにして3個ずつ2列に並べられ、南列と北列は鉢を向き合わせるように配されていた。1号鐸と2号鐸の間に4号鐸の鉢が、2号鐸と3号鐸の間に5号鐸の鉢が割り込むような形で並べられていた。いずれも鐸を垂直に立てた状態で出土しており、下側の鐸は坑底に食い込んでいた。南列の1~3号鐸は鐸身が水平になるように置かれていたが、北列の4~6号鐸は鉢が低く底部が高くなるように置かれていた。これは4~6号鐸部分の坑底が水平に掘削されなかつたためと思われる。

銅鐸・銅矛は埋納坑の中央及び東側に偏って埋納されていたが、西よりでは遺物が出土しなかつた。この部分は黄茶色土(第19層)が弧状に堆積していた(図版3)。この層は第17層とよく似ているが、試掘の際に既に掘りすぎていたため、17層と同一の層であるか否かの判断はできなかつた。

埋納の方法 土層の状況、銅鐸・銅矛の出土状態からみると、銅鐸・銅矛の埋納は次のような手順で行なわれたと考えられる。

- ①地山を段状に掘削する。
- ②淡黄色粘質土(第20層)を貼って坑底を谷側に拡張する。
- ③銅鐸・銅矛を坑底に直接置く。
- ④銅鐸・銅矛の上を明黄色粘質土(第18層)で覆う。
- ⑤さらにその上に暗褐色土(第17層)、茶色土(第11層)、茶褐色土(第10層)などを盛ってマウンド状にする。

銅鐸と銅矛は前述のように出土状態が若干違うが、直上に覆われた明黄色粘質土(第18層)に土層の変化が確認されなかつた。土層からみると銅鐸と銅矛は時期を異にして埋納された形跡はなく、両者は同時に埋納されたと思われる。

3 谷底部の調査

今回の調査では青銅器埋納に関連して、谷底の調査を行なつた。

調査の結果、この部分はかなりの土量が堆積しており、原地形は現在の地形とかなり異なる景観であったと思われる(第7図)。今回は発掘範囲が狭かったため最深部の地山は確認できなかつたが、地山は現在の地表面から2m以上深いと思われる。ここは青銅器が出土した丘陵とその南に位置する丘陵に挟まれた狭い谷底で、この谷底の地山は深い溝状を呈している。発掘部分の断面をみ



第7図 谷底部上層堆積状況 (NEO・NOEO・SIEO 西壁)

ると南北両丘陵の斜面上方では比較的緩やかだが下方は中途で急傾斜になり、傾斜変換点での幅約3.4 m、確認できた最下部での幅約0.5 mを測る。

旧表土は、近年、谷奥部から流れ出たと思われる約1 mほどの黄白色土層、黄褐色土層を約1 mほど除去した段階で検出した。旧表土の下は複雑な堆積状況を呈し、上から概ね炭化物、焼土ブロックを多量に含んだ黒色土層(第9層)、明黄色土層(第12層)、淡青灰色土層(第15層)などが複雑に堆積していた。ここではほとんど遺物は出土しなかったが、調査時最下部の淡青灰色土(第15層)および淡灰色土(第16層)中から須恵器甕胴部片が出土した。この須恵器片では詳細な時期を知ることはできない。

またS1EOおよびN1W1区では焼土を検出した。S1EOの焼土は第2層直下で検出され、熱残留磁気測定ではAD1250年ごろという推定年代が得られた。^{註1} この焼土の下約15cmの層(第10層)から出土した土師器底部片が奈良時代から平安時代ごろのものと思われることから、この焼土は青銅器には直接関係ないと考えられる。

なお、N1W1の焼土は残留磁気の方向が一定ではなく、年代を測定することは困難であった。
 註1、熱残留磁気による推定年代は、伊藤晴明、時枝克安の両氏の測定結果による。

第4章 銅鐸・銅矛

1 銅 鐸

銅鐸はいずれも25cm未満の小型のもので、5号鐸が菱環鉢1式の横帶文銅鐸であるほかは外緣付鉢1式の四区袈裟拵文銅鐸である。^{注1}置かれていた状態で1・2・3号鐸は西側を、4・5・6号鐸は東側をA面とした。

1号鐸(図版5・22) 総高23.4cm、鐸身高17cm、底径11.25×9.44cmを測る。鐸身は反り気味で、舞の形および底面形は円形に近い。鉢は、菱環部と呼ばれる部分が偏平な方形を呈し外縁部との境に段がつく特異な形態である(第8図上段左)。色調は淡緑色を呈す。

^{注2}鉢から鉢にかけて複合鋸齒文が施されるが、鉢外縁部中央及び菱環部は無文である。鐸身は縱横各3帯の斜格子文帯で4区に区画されるが、第1横帯の上部は舞と接していない。A面左下区、B面左上区には重弧文、A面右下区には重弧文と羽線を重ねた文様、B面左右下区には斜格子文で埋められた三角形文様が3段にわたり頂点を向い合わせて4列配されている。

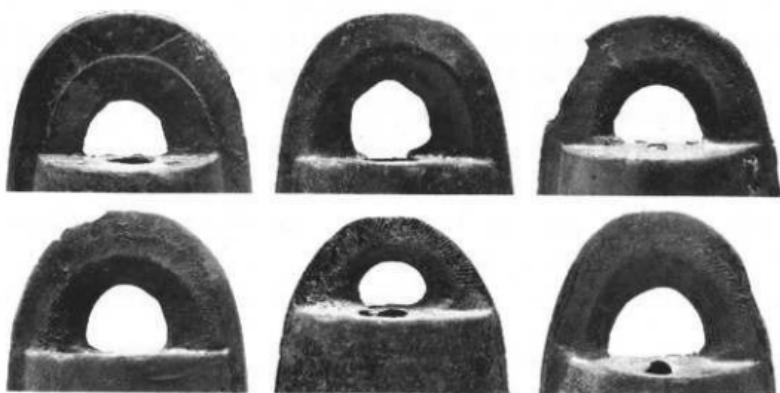
舞孔は内面からみると方形に凹んでおり、型持は1個使用されたと思われるが、現状では不整形の孔が2個あいている。内面からみた舞孔は「日」の字形を呈すが、これは断面が「凹」字形をする型持を使用したためと思われる。鐸身の型持孔は第1横帯と第2横帯の中間に方形の孔が片面に2個ずつある。この型持孔には一部に整形痕がみられる。

内面突帯は下端から約2cmの位置に1条あり、高さは比較的高く台形を呈す。頂面は平坦で稜は鋭い。また、底部下端は平坦に整形されている。

2号鐸(図版6・23-1) 総高23.7cm、鐸身高17.7cm、底径12.09×9.20cmを測る。鐸身の反りはやや強く、舞の形および底面形はアーモンド形である。色調は暗緑色を呈す。

文様は非常に不鮮明であるが、わずかながら鉢から鉢外縁部にかけて内向の鋸齒文、B面の菱環内斜面に棘杉文の一部と思われる斜線文が観察できる。鐸身は本来は縱横各3帯の斜格文帯で4区に区画されていたと思われるが、A面の各縦帯、第3横帯、B面の中央縦帯、第3横帯はほとんど観察できない。斜格子文帯はA・B面とも横帯が縦帯に優先している。また、B面第3横帯下には上向の鋸齒文と直線文1条がみられる。

舞孔は内面からみると方形に凹んでおり、型持は方形のものが1個使用されたものと思われるが現状では不整形の孔があいている。鐸身の型持孔は第2横帯の位置に方形の孔が片面に2個ずつある。この型持孔には一部に整形痕がみられる。



第8図 銅鑼の鉢(上段左から1・2・3号鉢、下段左から4・5・6号鉢)

内面突帯は下端から約2cmの位置に1条ある。高さは非常に低くて頂面は非常に滑らかである。

3号鉢(図版7・23-2) 縦高22.4cm、鉢身高17cm、底径 11.87×8.07 cmを測る。鉢身は反り気味で、舞の形および底面形はアーモンド形である。色調は淡緑色を呈す。

文様は縁から鉢外縁部にかけては内向の鋸歯文、鉢菱環部には綾杉文がわずかながら観察される。鉢身は縱横各3帯の斜格子文帯によって4区に区画され、第3横帯下には、上向の鋸歯文が施されている。斜格子文帯はA・B面とも横帯が縦帯に優先している。

舞孔は内面からみると方形に凹んでおり、堅持は1個使用されたと思われるが、現状では不整形の孔が2個あいている。鉢身の堅持孔は片面に第2横帯の位置に2個、裾部に2個ずつみられる。

内面突帯は底部下端から約1.5cmの位置に1条あるが中途が一部欠けている。これは湯回りが悪かったためであろう。底部端の一部にはわずかに甲張りが残っている。

4号鉢(図版8・25-1) 縦高23.8cm、鉢身高17.7cm、底径 12.30×9.46 cmを測る。鉢身は反り気味で、舞の形および底面形はアーモンド形である。色調は淡緑色を呈す。

文様は比較的鮮明である。縁の文様は観察できなかったが、鉢には綾杉文が観察された。この綾杉文は外縁部と菱環部の境、および菱環頂部を軸としたものである。

鉢身は縦横各3帯の斜格子文帯によって4区に区画され、第3横帯下には下向の鋸歯文、さらに3条の直線文が施されている。

舞孔は内側からみると方形に凹んでおり方形の堅持が1個使用されたと思われるが、現状は不整形の孔があいている。

鉢身の堅持孔は第2横帯のやや上に方形のものが片面に2個ずつある。

内面突帯は底部端から約1cmの位置に1条あり、高さは非常に低い。

5号鐸(図版9・24) 総高21.7cm、鐸身高17.8cm、底径12.71×9.52cmを測る。鐸身の反りはほとんどなく、舞の形および底面形はアーモンド形である。鉢は高3.9cmと鐸身高に比して低く、鎧幅は2mm前後と非常に狭い。色調は暗緑色を呈す。

鍔には文様は観察できないが、鉢外斜面に内向の鎧齒文、内斜面には斜線文がみられる。ただし、内斜面は不鮮明であるため鎧齒文の可能性もある。鐸身は上部に上から斜格子文帯、鎧齒文帯(A面は下向、B面は上向)、斜格子文帯、中央に綾杉文帯、下部に斜格子文帯、下向の鎧齒文帯が施されている。さらにその下には直線文2条がみられる。

舞孔は内面からみると方形に凹んでおり型持は1個使用されたと思われるが現状では不整形の孔2個がみられる。

鐸身の型持孔は中央の綾杉文帯の上部に方形の孔が1面に2個ずつある。

内面突帯は底部下端から約2cmの位置に1条廻っている。比較的高さは高く頂面は平坦で棱は規則的。なお、鍔、鉢の周縁は半張りを研ぎ落としたと思われる色の違いがみられる。

6号鐸(図版10・25-2) 総高23.7cm、鐸身高17.3cm、底径12.40×9.19cmを測る。鐸身は反り気味で、舞の形および底面形はアーモンド形である。色調は淡緑色を呈す。

文様は鍔には観察できないが、鉢外縁部に内向の鎧齒文、菱環部には綾杉文が施されている。鐸身は縦横各3帯の斜格子文帯によって4区に区画され、第3横帯下には上向きの鎧齒文、さらに直線文が2条施されている。斜格子文帯は横帯が縦帯に優先している。

舞孔は内面からみると方形に凹んでおり型持は1個使用されたと思われるが、現状では不整形の孔が2個みられる。鐸身の型持孔は第2横帯のやや上部に不整形の孔が片面に2個ずつあるが、本来は方形の計画であったと思われる。

内面突帯は底部下端から約1cmの位置に1条ある。高さは非常に低く頂面は平坦である。

なお、鍔の周縁は不規則な刻目状になっているが、これは欠損ではなく鋳造時につけられたものと思われる。

2 銅 矛

銅矛は1・2号矛が中細形であるほかは、すべて中広形である。7・8・13・14・15号矛は関部および鉄部中程で折れているが、いずれも完形に復元できる。これらは故意に折られたものではなく、埋納後の土圧によって折れたものと思われる。

1号矛(図版11・26) 鉄部先端が欠けるが現存長67.5cm、復元長69.4cm、関幅5.75cm、袋部下端径4.01×2.75cmを測り、淡緑色を呈す。鉄部は先細で極先端近くから次第に細くなる。極内面は匙

面状ではなく、ほぼ平坦である。節帯は鋲出されており幅は1.52cmと狭く、その上端は耳下側のふくらみに対応している。耳は厚くて小孔がある。袋部側面および耳周縁は甲張りを研ぎ落したと思われる痕跡がある。袋部内の真土は5cm以上抜き取られている。

1号矛は鋲造時に鋲型が上下方向にずれたようで片面は節帯下端からさらに0.6cm程樋が出ている(第12図1・2)。鋲型のずれのため耳の周縁には一見甲張りが残っているように見える。

2号矛(図版11・26) 全長69.6cm、闊幅5.62cm、袋部下端径3.58×2.95cmを測り、黒色を呈している。鋒部は先細で極先端近くから次第に細くなる。樋内面は匙面状ではなく、平坦である。節帯は鋲出されており、幅は1.16cmと狭い。その上端は耳下側のふくらみ断面で最も厚い部分に対応している。耳は厚く小孔がある。袋部内の真土はほとんど抜かれていません。

3号矛(図版11・26) 全長74.9cm、闊幅7.37cm、袋部下端径4.41×3.21cmを測り、色調は黒色を呈している。鋒部はやや幅広だが極先端近くから次第に細くなり、樋内面は匙面状を呈す。節帯は鋲出されており、その上端は耳下側のふくらみのやや上に対応している。耳は厚く小孔があり、ふくらみ頂部は突線状に文様化している。袋部から耳周縁にかけて甲張り転用突線文がある。闊側縁には沈線文が1条施されている。袋部内の真土は抜かれていません。

4号矛(図版11・26) 鋒先端が若干欠けるが、現存の全長82.3cm、闊幅9.13cm、袋部径5.00×4.05cmを測り、色調は黒色を呈す。鋒部は先膨らみになり、鋒部先端は面取りされ平坦面をなす。樋内面は匙面状を呈している。耳はやや偏平で孔はない。節帯は鋲造後削り出しによって段状につけられ、耳上側のふくらみに対応している。袋部側縁から耳周縁にかけては甲張り転用突線文がある。袋部内の真土は抜かれていません。

鋒部・刃部は研ぎ分けられ、綾杉文様に構成されている(第9図)。研ぎの幅は約1.6~2.0cm、鋸に対しても角度は約70度~80度である。

5号矛(図版12・27) 全長83.5cm、闊幅9.11cm、袋部下端径5.23×4.00cmを測り、暗緑色を呈す。鋒部は先膨らみになり、鋒部先端は面取りされ平坦面をなす。樋内面は匙面状を呈している。耳はやや偏平で孔はない。節帯は鋲造後削り出しによって段状につけられ、その上端は耳の中央よりやや上に対応している。袋部側縁から耳周縁にかけては甲張り転用突線文がある。袋部内の真土は抜かれていません。

なお、鋒部には鋸に対して約70度の角度で研ぎの痕跡が観察できる。



第9図 4号矛の研ぎ分け

6号矛(図版12・27) 全長79.9cm、闊幅8.74cm、袋部下端径5.25×3.67cmを測り、淡緑色を呈す。全体に土圧のためにわずかに反っている。鋒部は先膨らみになり、鋒部先端は面取りされ平坦面をなす。柄内面は匙面状を呈している。耳は偏平で小孔があるが、湯回りが悪いためか意識的にあけたものかは不明である。節帶は鋸造後削り出しによって段状につけられ、その上端は耳のほぼ中央に対応している。袋部側縁から耳周縁にかけては甲張り転用突線文がある。袋部内の真土はほとんど抜かれていません。

なお、鋒部先端には鎬に対して約70度～80度の角度で研ぎの痕跡が観察される。

7号矛(図版12・27) 全長82.1cm、闊幅9.44cm、袋部下端径5.38×3.95cmを測り、暗緑色を呈している。鋒部は先膨らみになり、鋒部先端は面取りされ平坦面をなす。柄内面は匙面状を呈し、耳は偏平で孔はない。節帶は鋸造後削り出しによって段状につけられ、耳の中央よりやや上に対応している。袋部側縁から耳周縁にかけては甲張り転用突線文がある。袋部内の真土はほとんど抜かれていません。

鋒部・刃部は研ぎ分けられ、棱杉文様に構成されている。研ぎの幅は約2.0～2.4cm、鎬に対しての角度は75度前後である。

8号矛(図版12・27) 鋒先端部は欠損するが現存長79.4cm、闊幅8.31cm、袋部下端径5.05×3.76cmを測り、色調は暗緑色を呈す。鋒部は先膨らみになり、鋒部先端は面取りされているようである。柄内面は匙面状を呈す。耳は偏平で小孔があるが、この小孔は鋸造後に整形されたように思われる。節帶は鋸造後削り出しによって段状につけられ、上端は耳下側のふくらみに対応している。袋部側縁には甲張り転用突線文がみられるが、耳周縁にはみられない。袋部内の真土はほとんど抜かれていません。

9号矛(図版13・28) 全長83.1cm、闊幅9.14cm、袋部下端径5.40×3.96cmを測り、色調は暗緑色を呈す。鋒部は先膨らみにより、鋒部先端は面取りされ平坦面をす。柄内面は匙面状をなし、耳は偏平で孔はない。節帶は鋸造後削り出しによって段状につけられ、その上端は耳の中央に対応している。袋部側縁および耳周縁には甲張り転用突線文がある。袋部内の真土はほとんど抜かれていません。

10号矛(図版13・28) 全長83.1cm、闊幅8.90cm、袋部下端径5.30×3.87cmを測り、色調は暗緑色を呈す。全体にわずかに反っているが、これは土圧のためと思われる。鋒部は先膨らみになり、鋒部先端は面取りされ平坦面をなす。柄内面は匙面状をなし、耳は偏平で孔はない。節帶は鋸造後削り出しによって段状につけられ、その上端は耳のほぼ中央に対応している。袋部側縁および耳周縁には甲張り転用突線文がみられる。全体の法量・形狀は9号矛に酷似していることが注意される。袋部内の真土は抜かれていません。

なお、袋部下端には1.4cmにわたって鉤かけがみられる(第12図7・8)。下端から1.4cmの部分に半円形の割り込みが2箇所みられることから、平形銅劍などによく見られる足がかりを設けて鉤かけが行なわれたと考えられる。

11号矛(図版13・28) 全長84.1cm、闊幅9.79cm、袋部下端径5.88×4.17cmを測り、今回出土した銅矛の中では最大のものである。色調は淡緑色を呈す。鋒部は先端は先彫らみになり、鋒部先端は面取りされ平坦面をなす。桶内面は匙面状をなし、耳は偏平で孔はない。節帶は鋸造後削り出しによって段状につけられ、その上端は耳中央に対応している。袋部側縁および耳周縁には幅広の甲張り転用突線文がある。袋部内の真土は抜かれていらない。

12号矛(図版13・28) 全長74.6cm、闊幅7.54cm、袋部下端径4.81×3.45cmを測り、色調は淡緑色を呈す。全体にかなり反っているが、これは土圧のためと思われる。鋒部は先彫らみになり、鋒部先端は面取りされ平坦面をなす。桶内面は匙面状をなし、耳は偏平で孔はない。節帶は鋸造後削り出しによって段状につけられ、その上端は耳のほぼ中央に対応している。袋部側縁および耳周縁には甲張り転用突線文がみられる

13号矛(図版14・29) 全長82.3cm、闊幅8.61cm、袋部下端径5.42×4.12cmを測り、色調は暗緑色を呈す。鋒部は先彫らみになり、鋒部先端は面取りされ平坦面をなす。桶内面は匙面状をなし、耳は偏平で孔はない。節帶は鋸造後削り出しによって段状につけられ、耳の中央に対応している。袋部側縁および耳周縁には甲張り転用突線文がある。袋部内の真土はほとんど抜かれていらない。

鋒部、刃部は研ぎ分けられ、綾杉文様に構成されている。研ぎの幅は約1.6~2.0cm、鏑に対する研ぎの角度は75度~80度である。

14号矛(図版14・29) 鋒部先端は若干欠けるが、現存長71.4cm、闊幅7.18cm、袋部下端径4.37×3.21cmを測り、色調は黒色を呈す。鋒部はやや幅広だが桶先端近くから次第に細くなり、桶内面は匙面状をなす。節帶は鋸出されており、その上端は耳下側のふくらみに対応する。耳はやや厚みがあるが孔はない。袋部側縁には甲張り転用突線文がみられる。袋部内の真土はほとんど抜かれていない。

刃部から鋒部にかけては鏑に対して約80度~90度の角度の研ぎの痕跡が全面に観察できる。

15号矛(図版14・29) 全長83.6cm、闊幅9.25cm、袋部下端径5.30×4.20cmを測り、色調は暗緑色を呈す。鋒部は先彫らみになり、鋒部先端は面取りされ平坦面をなす。桶内面は匙面状を呈し、耳は偏平で孔はない。節帶は鋸造後削り出しによって段状につけられ、その上端は耳のほぼ中央に対応している。袋部側縁および耳周縁には甲張り転用突線文がみられる。袋部内の真土は抜かれていらない。

刃部から鋒部は研ぎ分けられ、綾杉文様に構成されている。研ぎの幅は約1.2~2.2cm、鏑に対する

る研ぎの角度は約70度～80度である。

18号矛(図版14・29) 全長78.8cm、闊幅8.20cm、袋部下端径5.24×4.04cmを測り、色調は暗緑色を呈す。鋒部は先膨らみになり、鉢部先端は面取りされ平坦面をなす。柄内面は匙面状を呈し、耳は偏平で孔はない。節帶は鋸造後削り出しによって段状につけられ、その上端は耳下側のふくらみに対応している。袋部側縁および耳周縁には甲張り転用突線文がみられる。袋部内の真土はほとんど抜かれていません。

鋒部・刃部の一部には鎗に対して約80度の角度で研ぎの痕跡が観察できる。

註1. 佐原真「銅鐸の鋸造」『世界考古学大系』2 1960年

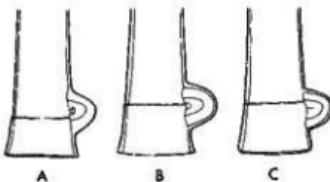
註2. 通常の複合筋歯文は三角形の中にその一斜辺と平行する線を数本入れるが、

1号鐸では不然である。

註3. 実測時にはガーベで補強されていたためA面最下部の直線文1条は図示し得なかった。

註4. 岩永省三「弥生時代青銅器型式分類編年再考」『九州考古学』55 1980年

註5. 近藤高・「平形鋼劍と銅鐸の関係について」『古代学』17 3 1970年

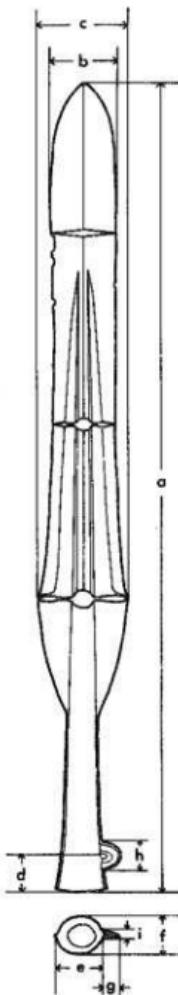


第10図 節帯上端の位置

A 上端が耳下側のふくらみに対応

B 上端が耳中央に対応

C 上端が耳上側に対応



第11図 鋼不の計測位置

表 1 鋼 鋼 計 測 表 (単位 cm)

番号	鉄		舞 仕		底 仕		轟 幅		内 面 突 带				型式文様	備考							
	総高 高	舞身高 舞身中 央の厚さ	長径 長径	包 径	長 径	短 径	右 肩	右 横	左 肩	左 横	A面中央 幅	B面中央 幅	A面左 幅	A面右 幅							
1	23.4	6.2	0.53	17.0	8.0	6.8	11.25	9.44	1.24	不明	1.24	1.41	0.84	0.64	0.93	0.71	0.79	0.60	0.79	0.56	外縫1 四区裂 根部端を面取り
2	23.7	6.0	0.60	17.7	8.4	6.4	12.09	9.20	0.74	1.14	0.78	0.98	1.04	0.46	0.71	0.34	1.04	0.58	1.00	0.51	外縫1 四区裂 持孔をわずかに整形
3	22.4	5.3	0.43	17.0	8.1	6.1	11.87	8.07	0.76	0.97	0.67	1.00	0.65	0.38	0.60	0.40	0.45	0.40	0.53	0.56	外縫1 四区裂 根部端に甲彫り
4	23.8	6.1	0.60	17.7	8.5	7.1	12.30	9.46	0.96	1.07	0.78	1.00	0.85	0.41	0.98	0.47	0.90	0.33	0.88	0.50	外縫1 四区裂
5	21.7	3.9	0.53	17.8	8.5	6.7	12.71	9.52	0.11	0.13	0.11	0.17	0.75	0.55	0.82	0.58	0.94	0.66	0.82	0.83	菱環1 横 帯
6	23.7	6.4	0.50	17.3	8.4	6.3	12.40	9.19	0.66	1.42	0.86	1.02	0.86	0.57	0.81	0.42	0.63	0.61	0.98	0.57	外縫1 四区裂 縫に胡み

表 2 鋼 破 計 測 表 (単位 cm)

番号	全長(a)	鉄部最大幅(b) (その部分の厚さ)	鋼部最大幅(c) (その部分の厚さ)	鉄先端厚	節 带				刃			色調	分類	備考
					d(幅)	e	f	位置	g(高)	h(幅)	i(厚)			
1	(67.5)	(鉄端から15cmで の厚1.08)	5.75 (1.88)	—	1.52	4.01	2.75	A	1.62	2.95	0.62	淡 緑	I	錐型がされた痕跡
2	69.6	(鉄端から15cmで の厚0.98)	5.62 (1.58)	—	1.16	3.58	2.95	A	1.32	2.39	0.61	暗	I	
3	74.9	(鉄端から15cmで の厚1.18)	7.37 (2.01)	—	2.28	4.41	3.21	A	1.81	2.96	0.78	黒	II	
4	(82.3)	6.39 (0.84)	9.13 (1.86)	0.18	3.35	5.00	4.05	C	2.11	2.78	0.68	黒	III	研ぎ分け
5	83.5	6.62 (0.72)	9.11 (1.86)	0.08	3.79	5.23	4.00	C	2.03	2.95	0.71	暗 緑	III	
6	79.9	7.25 (0.90)	8.74 (1.70)	0.23	3.48	5.25	3.67	B	2.11	2.85	0.59	淡 緑	III	
7	82.1	7.94 (0.63)	9.44 (1.75)	0.35	3.82	5.38	3.95	B	2.18	3.32	0.71	暗 緑	III	研ぎ分け
8	(79.4)	6.31 (0.75)	8.31 (1.80)	0.13	2.58	5.05	3.76	A	1.82	2.82	0.63	暗 緑	III	
9	83.1	6.98 (0.76)	9.14 (1.91)	0.16	3.41	5.40	3.96	B	2.21	3.08	0.67	暗 緑	III	
10	83.1	6.87 (0.75)	8.90 (1.93)	0.17	3.36	5.30	3.87	B	2.19	3.01	0.67	暗 緑	III	
11	84.1	8.20 (0.59)	9.79 (1.82)	0.41	4.29	5.88	4.17	B	(1.98)	3.34	0.47	淡 緑	III	
12	74.6	6.04 (0.74)	7.54 (1.85)	0.26	2.99	4.81	3.45	B	1.90	2.75	0.56	淡 緑	III	袋部に鶴かけ
13	82.3	7.25 (0.60)	8.61 (0.83)	0.31	3.39	5.42	4.12	B	2.03	2.88	0.77	暗 緑	III	研ぎ分け
14	71.4	(鉄端から16cmで の厚1.34)	7.18 (2.03)	—	2.39	4.37	3.21	A	2.02	3.23	0.72	黒	II	
15	83.6	6.70 (0.84)	9.25 (1.96)	0.21	3.39	5.30	4.20	B	2.21	3.22	0.60	暗 緑	III	研ぎ分け
16	78.8	6.93 (0.62)	8.20 (1.95)	0.24	2.40	5.24	4.04	A	2.02	3.11	0.73	暗 緑	III	

第5章 ま　と　め

荒神谷遺跡では、昭和59年の中細銅劍358本の出土に続き、今年度は銅鐸6個、銅矛16本が出土した。これらの発見は今まで不明瞭であった青銅器埋納を解明する上で良好な資料であり、今後の青銅器研究に欠くべからざるものと言えよう。

今回の調査での最大の成果は銅鐸・銅矛の埋納状態が把握できたことである。青銅器は偶然発見される場合がほとんどで、埋納状態については聞き書きによる報告が多いが、それによると大多数の銅鐸は横位に置かれていたようである。その場合、鐸を垂直方向に置くものと水平方向に置くものがある。また複数埋納の場合、大小の銅鐸を入れ子にするもの、水平位置に並べるもの、2段以上に重ねるものなどがあるが、水平位置に並べるものが多いようである。その場合、鉢を同一方向に向けるものと鉢と底部を交互に向けるものがある。

銅矛については、刃を垂直に立てるものと水平にするものとがあり、複数埋納の場合鉢部を同一方向に揃えるものと鉢部と袋部を交互にするものなどがある。

荒神谷遺跡では、銅鐸は鐸を垂直に立て鉢を向き合わせるように2列に、銅矛は刃を立て鉢部と袋部を交互にして埋納されていた。このような埋納状態は多少の違いはあるにしても上述の他遺跡における例と大きく矛盾するものではなく、比較的一般的な埋納状態といえよう。

埋納地の立地をみると、荒神谷遺跡は谷の最奥部の丘陵斜面に立地している。一般に青銅器、特に銅鐸は人里離れた地に隠すように埋納されたものが多いとされ、本遺跡も青銅器埋納地としては一般的と思われる。ただ、そのすべてが山かけに埋納されているのではなく、低地または低地に近い丘陵斜面に埋納されている例も少なくない。また、埋納時期の前後に集落が形成された遺跡もいくつかあり、青銅器埋納地のすべてが集落の形成されない場所を選定しているわけではない。この立地の違いがどのような性質の違いを表わすか知る術はないが、これらをすべて同一の性質を持つものとするには若干の疑問を抱かないでもない。

今年度発掘した銅鐸・銅矛埋納坑は、銅劍埋納坑の東方わずか7m程の位置にあり、坑底のレベルもほとんど同じである(図版1・21)。また両者とも地山を掘削して埋納坑を段状に造り出し、青銅器を粘質土で覆うという埋納方法を用いている。これらのことを考えると、銅劍と銅鐸・銅矛は偶然に場所を隣にして埋納されたとは考えにくく、両者はほぼ同時期に埋納されたか、もしくはどちらか一方の埋納が行なわれた後にあまり間をおかずして他方の埋納が行なわれたと想像される。

埋納の時期については、両者とも時期を決定する遺物が出土しておらず、また青銅器そのものが伝世されると肯う問題もあるため、現時点では判断できない。ただ、出土した青銅器のうち最も新

しいものの製作時期が埋納の上限とするなら、銅劍埋納は弥生時代中期末から後期初頭（中細銅劍²¹⁴類）以降、銅鐸・銅矛埋納は中期末から後期前半（中広銅矛²¹⁵）以降に行なわれたと考えられる。

このように、銅劍埋納と銅鐸・銅矛埋納は互いに何らかの関係を持って行なわれたと想像されるが、細部ではかなりの違いがみられる。以下、両者の違いを列挙すると、次のような点を指摘することができる。²¹⁶ ①銅劍埋納坑には上段テラスが設けられているが、銅鐸・銅矛埋納坑にはない。②銅劍埋納坑下部には小土坑があるが、銅鐸・銅矛埋納坑にはない。③銅劍埋納坑下部の地山面は谷側（南側）がわずかに立ちあがり壁状になっているが、銅鐸・銅矛埋納坑にはない。④銅劍の下には全面に粘土が敷かれていたが、銅鐸・銅矛の下には同様の粘土はなかった。⑤銅劍の直上には黒褐色有機質²¹⁷が観察されたが、銅鐸・銅矛の周囲ではみられなかった。⑥銅劍埋納は同一器種、同一型式のものが多數埋納されているのに対し、銅鐸・銅矛埋納は2器種、2型式にわたるもののが埋納されている、このうち両者の最も大きな相違点は、⑥で指摘した埋納内容の違いである。これらのことから両者が異った性質を持ったものとして区別された可能性もある。

荒神谷遺跡の銅鐸・銅矛埋納の特徴は前述のように、異器種、異型式の同時埋納である。銅矛群はほぼ垂直に掘り込まれた壁に「コ」の字形に囲まれるように置かれているが、これは銅鐸群との境界を作っているような感じを受ける。これらのことから銅鐸群と銅矛群はある程度別の性質をもったものとして扱われていた可能性もある。

今回出土した銅鐸は菱環鉄²¹⁸ 1式1個(5号鐸)と外縁付鉄²¹⁹ 1式5個(1~4号鐸、6号鐸)の計6個であった。菱環鉄式銅鐸は最古段階のものとされ、現在5個知られる。そのうち1式とされるのは東京国立博物館所蔵35509号鐸(出土地不詳)。兵庫県洲本市中川原鐸²²⁰の2個で、東博35509号鐸²²¹が中川原鐸に先行すると考えられる。荒神谷5号鐸は、鐸の幅が狭く一定幅を保っていないことなどから、中川原鐸より先行すると思われる。一方、東博35509号鐸と5号鐸を比べると鈕の厚さ、鐸身の文様構成などが若干違うものの、鐸の正面形、鍔の様相、鐸身の反りなど両者の全体の雰囲気は非常によく似ていると言える。

1号鐸は外縁付鉄²²² 1式の四区袈裟摩文銅鐸であるが鍔の断面形、鐸身の文様など特異な銅鐸である。袈裟摩文銅鐸で鐸身の区画内に文様が描かれるものは比較的多いが、その多くは双頭満文である。幾何学的な文様が描かれるものとしては鳥根県伝木本式鐸²²³、愛知県谷ノ口鐸²²⁴、兵庫県森鐸²²⁵などが知られるだけである。また、鈕菱環部の断面が菱形をしない銅鐸も他に例がない。このように1号鐸は非常に個性の強い銅鐸であるが、細部については邪視文系横帯文銅鐸と似る部分がみられる。邪視文系横帯文銅鐸は、鍔から鉄にかけて複合鋸歯文で飾られ、鐸身の第1横帯上部に無文帯がある。また、広島県福田木ノ宗山鐸²²⁶、岡山県足守鐸²²⁷、伝伯耆鐸²²⁸などの鐸身には内に向いた重弧文が配されている。さらに上面觀、低面觀とも一般の銅鐸に比べ円形に近く、鐸身の反りは他の銅鐸に比

べ弱い。鉢の断面形についてみると、福田木ノ宗山鉢、伝伯耆鉢の外縁部と菱環部の境にはわずかにがら段がつくようである。

このように1号鉢と羽視文系横帶文銅鉢は細部については類似する点がある。しかしながら全体としては両者の文様構成にかなりの違いがみられ、1号鉢を羽視文系横帶文銅鉢の系列とみなすには躊躇される。1号鉢についてはその系譜、製作地など不明な点が多いといわざるをえない。

4号鉢は外縁付鉢1式の四区袈裟律文銅鉢であるが、通常のものとはやや異なり鉢の菱環部、外縁部とも綾杉文で飾られ、鉢身下部の鉢内文が下向であることが特徴である。皆見によれば鉢全面が綾杉文で飾られる銅鉢は福井県井上2号鉢、鉢身下部の鉢内文が下向の銅鉢は東博35509号鉢、兵庫県中川原鉢だけである。これらの銅鉢がいずれも菱環鉢式であることを考えると、4号鉢の文様の特徴は古式の様相をとどめていると思われる。しかし、型式の上では4号鉢が外縁付鉢1式であることには変更の余地がない。外縁付鉢1式銅鉢のなかでは他に比較する資料がないため、ここでは4号鉢が古式の様相を持つことを指摘するにとどめたい。

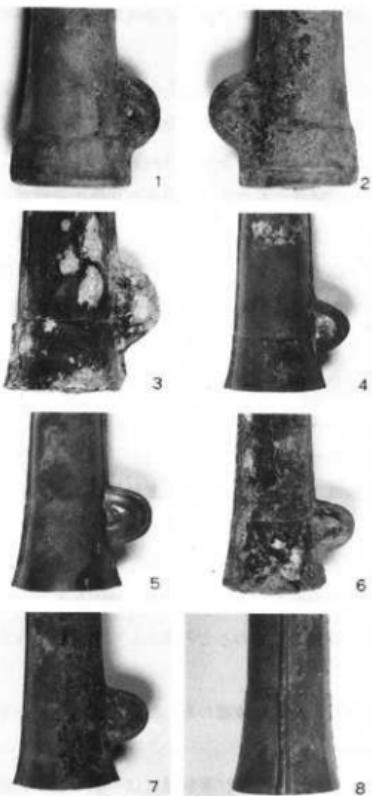
2・3・6号鉢は鉢の外縁が内向の鉢曲文、菱環部が綾杉文で飾られる(第8図)。外縁付鉢式の袈裟律文銅鉢で菱環部全面を綾杉文で飾るものは、島根県志賀奥1号鉢、同伝熊野鉢、同伝木次鉢、³²⁵ 兵庫県野々間1号鉢、奈良県秋篠4号鉢などが知られ、その数は比較的少ない。このうち2・3・6号鉢と最も似た文様構成をするものは志賀奥1号鉢、伝熊野鉢である。しかしこれらの銅鉢は縦帶と鱗、舞と第1横帶とが接しておらず、わずかに隙間がある。また鉢の綾杉文帯の数も2・6号鉢と違っている。2・3・6号鉢と同范と考えられる銅鉢は現在のところ出土していないようである。

銅矛は今回中細形および中広形が計16本出土したが、これらは鉢部の形、柄の断面形などから次のI～III類に分類できる。

I類は1・2号矛である。鉢部が先彫みにならず、袋部側縁および耳周縁には甲張り転用突線文がつかない。全体に細身で、全長は70cmに満たない。また柄内面はほぼ平坦である。節帯は鋲出されており、節帯幅は1.16～1.52cmと狭い。その上端は耳下側のふくらみに対応している。

II類は3・14号矛である。鉢部幅はI類に比べ広いが先彫みにはならず、袋部側縁および耳周縁には甲張り転用突線文がみられる。全長は3号矛が74.9cm、14号矛が71.4cmを測る。柄内面は匙面状を呈す。節帯は鋲出されており節帯幅は2.28～3.39cmを測る。その上端は耳の下側のふくらみに対応している。

III類は4～13・15・16号矛の12本で、今回出土した銅矛のうち4分の3を占める。鉢部は先彫みに抜かり、全長は74.6～84.1cmを測る。袋部側縁および耳周縁には甲張り転用突線文がみられる。柄内面は匙面状を呈している。節帯は削り出しによって段状につけられており、節帯幅は2.40～4.29



第12図 銅矛節帶部分 (1・2 1号矛一鋒型の
すれ、3 14号矛一鈎だしによる節帶、4・5・
6・8・9・4号矛一削り出しによる節帶上端と
耳の対応、7・8 10号矛一鈎かけ)

から節帶は鋒型製作時に既に節帶位置が決定されていたと考えられ、鋒部後節帶位置が決定されたIII類と製作手法上根本的な違いがみられる。このようにII類とIII類は形態、製作手法上大きな違いがあり、両者は区別されるべきものと思われる。

III類のうち4・7・13・15号矛の鋒部 刃部は研ぎ分けによって綾杉文様が構成されている。この文様を持つ銅矛は、調整手法の上で他の銅矛と若干の違いがみられる。無文の銅矛は鈎に対しても約80度前後に研磨されているのに対し、研ぎ分け文様のある銅矛は一旦鈎に対して約90~100度の

cmを測る。その上端は耳下側のふくらみに対応するもの、耳中央に対応するもの、耳上側のふくらみに対応するものの3種類ある。(第10・12図)。

荒神谷遺跡から出土した銅矛は以上の3類に分類できる。これらを従来の型式分類に当てるとき、I類が岩永省三氏の中細b類、近藤¹³⁰喬一氏の中細形、II類が岩永氏の中広、近藤氏の中広形I、III類が岩永氏の中広、近藤氏の中広形I(8・16号矛)、中広形II(4~7・9~13・15号矛)となる。

III類としたもののうち8・16号矛は節帶の位置からみると近藤分類の中広形Iであり、II類銅矛の範疇に入るべきかもしれない。しかし、8・16号矛は鋒部が先膨みに広がり、また節帶が鋒部後削り出しによって段状につけられている。これらの特徴は形態、製作手法の上では他のIII類銅矛と同じものと言える。III類の節帶と耳の対応関係はまちまちであるが、これは節帶が削り出しによってつけられたためと思われ、III類が鋒部後削り出しによってつけられた場合にはすでに耳と節帶の位置関係に一定のきまりがなくなっていたのではないか。

一方、II類は鋒部が先膨みにならず、節帶は鋒部後削り出しによってつけられている。このこと

角度で全面研磨し、その後80度前後に角度を変えて研磨されている。

このような文様を持つ例は佐賀県山達原遺跡、同検見谷遺跡などが知られる。荒神谷遺跡出土の研ぎ分け文様を持つ銅矛は検見谷例と施文の方法も変わらないようで、また鋒部、袋部などの調整も似ている。こうしたことから北部九州地方との関係が深いものと思われる。^{注33}

また10号矛の袋部下端には約1.4cmにわたって鉛かけが認められる。これは元の部分に半円形の剥り込みを両面に2ヶ所ずつ入れて足がかりとする手法で、扁平鉗式銅鐸、平形銅劍に多くみられる^{注34}。この手法は扁平鉗式銅鐸、平形銅劍の分布から大阪湾沿岸地方の銅鐸工人グループの手によったと考えられており、香川県高松市庵治町内山出土の銅矛も北九州で製作された後、大阪湾周辺で鉛かけが行なわれさらにその後に内山に埋納された、という考えもある。しかし10号矛がそのような複雑なコースで荒神谷遺跡に埋納されたとは考えにくく、銅矛工人集団も同様な鉛かけの技術を持っていていたと考えるのが妥当ではなかろうか。

以上、荒神谷遺跡の青銅器埋納状態、銅鐸・銅矛について他例と比較、検討を試みた。島根県下の青銅器研究は、資料が少ないこともあってほとんどなされていないのが現状である。最近の青銅器研究は自然科学の方面から原料の産地を推定する研究も進んでおり、荒神谷遺跡出土の青銅器についてもこの方面での研究が待たれるところである。また個々の青銅器をさらに詳細に比較検討した上で、当地方の青銅器の系譜について解明する必要があろう。荒神谷遺跡をめぐる問題は多いが、その解明にはまず当地方の弥生遺跡・遺物について総合的な研究を行ない、その中で荒神谷遺跡の位置づけをなすべきであろう。

註1. 三重県比上銅鐸、同鐵山銅鐸、兵庫県栄根銅鐸ほかその例は多い。梅原未治「銅鐸の研究」<復刻版> 1985年

註2. 奈良県火打銅鐸、大阪府神戸銅鐸、香川県一ノ谷銅鐸（以上註1論文）など。

註3. 奈良県石上銅鐸、愛知県外山銅鐸、静岡県悪ヶ谷銅鐸（以上註1論文）など。

註4. 大阪府四条畷銅鐸、静岡県芳川銅鐸（以上註1論文）滋賀県小篠原銅鐸（水野正好「滋賀県野洲郡野洲町小篠原銅鐸埋藏遺跡調査概要」『日本考古学協会昭和37年度大会研究発表要旨』1962年）など。

註5. 静岡県木船銅鐸、鳥取県中野銅鐸（以上註1論文）徳島市源田銅鐸〔木文雄「阿波國名西郡源田出土の銅鐸とその遺跡」『考古学雑誌』36-2（1950年）〕など。

註6. 徳島県曲り銅鐸、静岡県敷地銅鐸（註1論文）など。

註7. 静岡県木船銅鐸（註1論文）など。

註8. 和歌山県茨木銅鐸、静岡県伊奈銅鐸（以上註1論文）など。

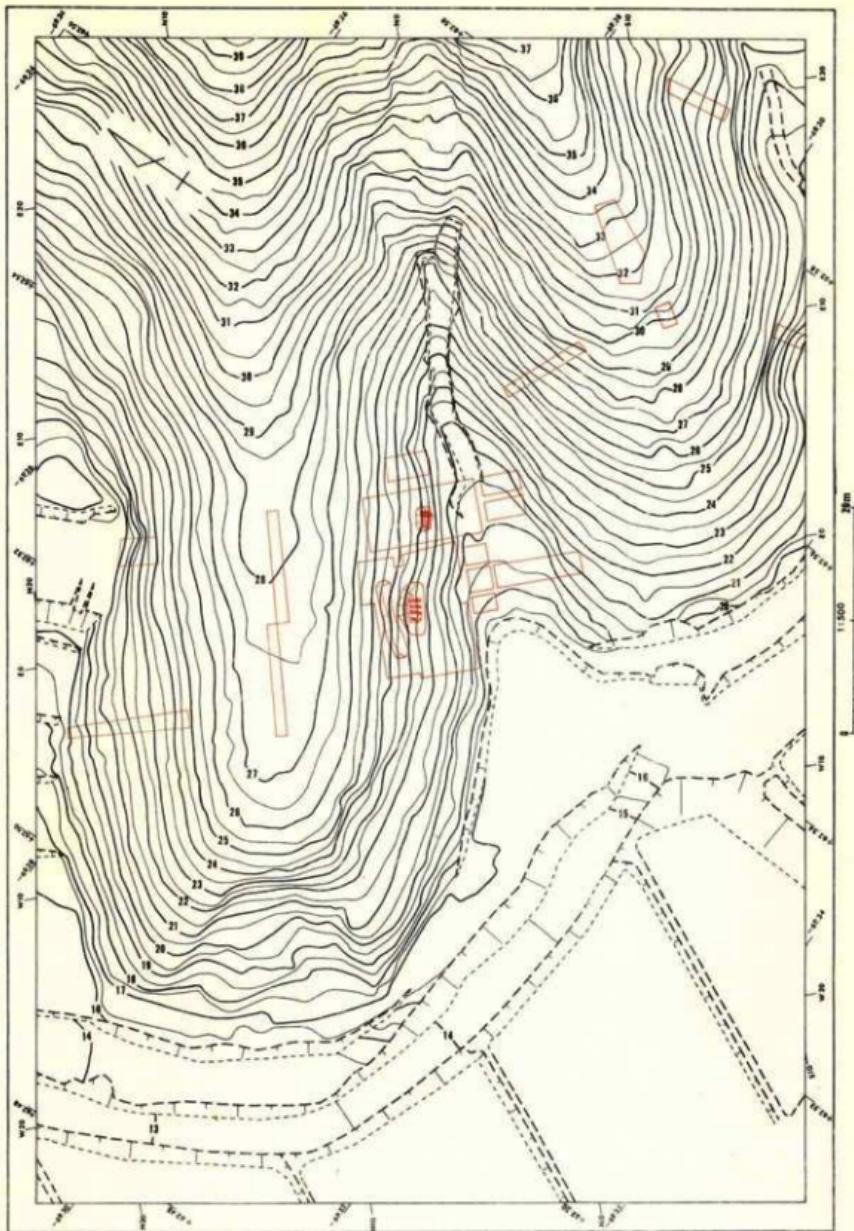
- 註9. 福岡県小倉西方遺跡（渡辺正氣・小田富士雄・松岡史「福岡県春日町新発見の銅矛」『九州考古学』13 1961年）など。
- 註10. 大分県坊主山遺跡（賀川光夫「新たに発見された東九州の銅鉢銅矛」『考古学雑誌』39-2 1953年）など。
- 註11. 武末純一「埋納銅矛論」『古文化談叢』9 1982年
- 註12. 佐原真「銅鐸の祭り」『古代史発掘』5 1974年
- 註13. 静岡県伊奈銅鉢（註1論文）など。
- 註14. 年代は九州地方の弥生土器編年による（九州歴史資料館「青銅の武器」 1980年）
- 註15. 註11と同じ。
- 註16. 烏根県教育委員会「荒神谷遺跡銅劍発掘調査概報」 1985年
- 註17. 佐原真・森皮秀爾「銅鐸地名表」『考古学ジャーナル』210 1982年
- 註18. 春成秀爾「最古の銅鐸」『考古学雑誌』70-1 1985年
- 註19. 梅原末治「銅鐸に関する若干の新知見」『考古学雑誌』31-5 1941年
- 註20. 註1と同じ。
- 註21. 東京国立博物館「東京国立博物館団版目録 弥生遺物編(金属器)」 1981年
- 註22. 註1と同じ。
- 註23. 註1と同じ。
- 註24. 註1と同じ。
- 註25. 註18と同じ。
- 註26. 島根県鹿島町教育委員会「志谷奥遺跡」 1976年
- 註27. 藤部昭「出雲・隱岐発見の青銅器」『古文化談叢』8 1981年
- 註28. 村川行弘「銅鐸3例」『考古学雑誌』68-1 1982年
- 註29. 註1と同じ。
- 註30. 岩永省三「弥生時代青銅器型式分類編年再考」『九州考古学』55 1980年
- 註31. 近藤尚一「朝鮮・日本における初期金属器文化の系譜と展開」『史林』52-1 1969年
- 註32. 岩永省三氏の教示による。
- 註33. 七田忠昭「裝飾文様を施す銅矛について」『考古学雑誌』70-4 1985年
- 註34. 大分県安心中町宮迫上中広銅矛にも同様の鑄かけがみられる。（後藤直「人面付銅矛」『福岡市立歴史資料館研究報告』第4集 1980年）
- 註35. 近藤尚一「平形銅劍と銅鐸の関係について」『古代学』17-3 1970年
- 註36. 註35と同じ。
- 註37. 岡本健児「四国の銅矛形祭器と水靈信仰」『國學院雑誌』78-9 1977年

図 版



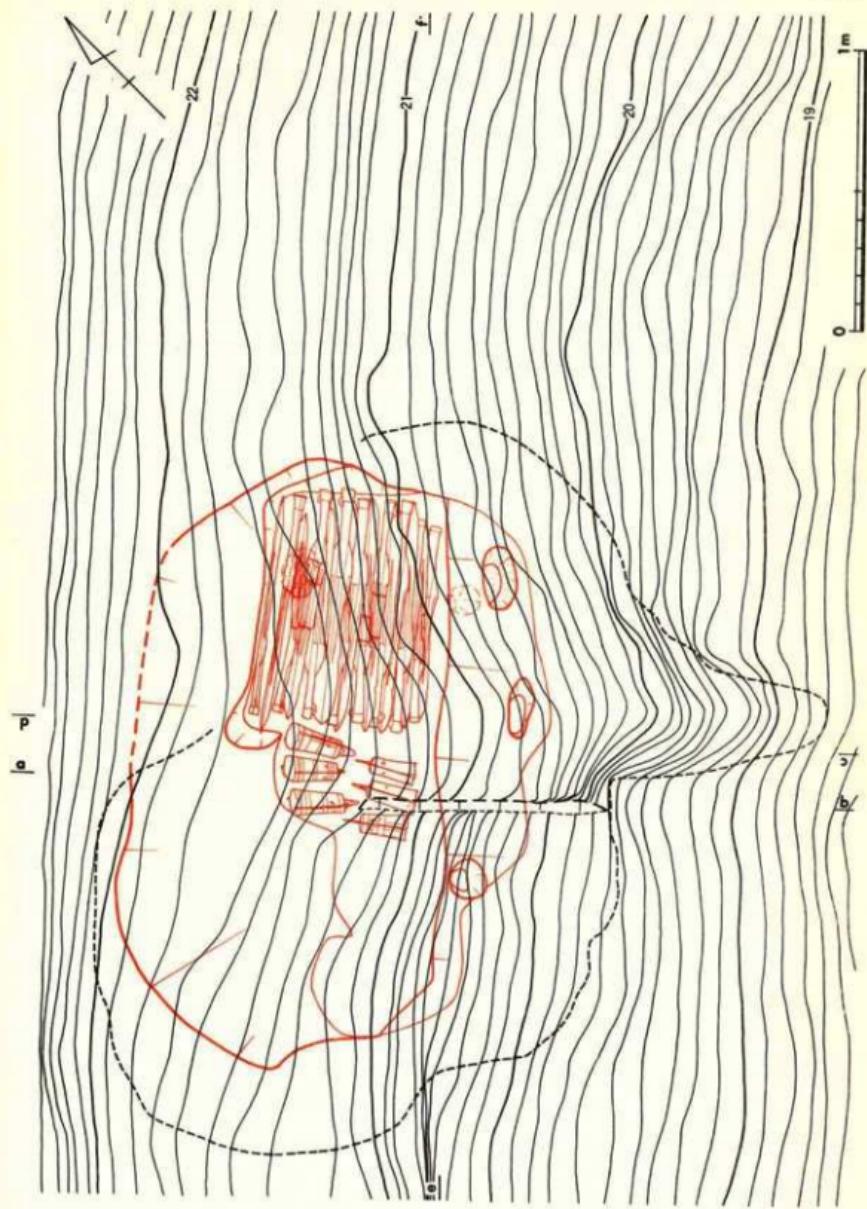
荒神谷遺跡地形測量図（赤は発掘区）

図版 1



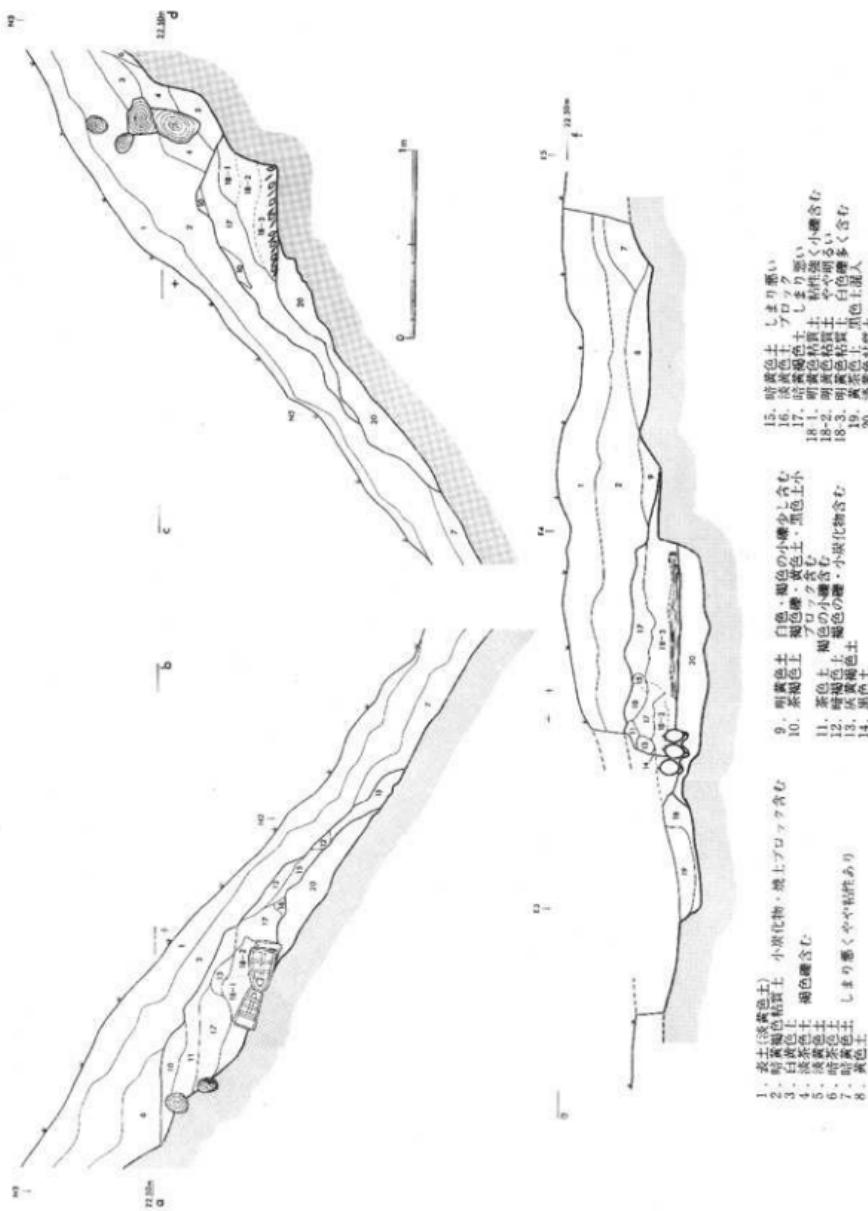
埋納坑埋土検出状況

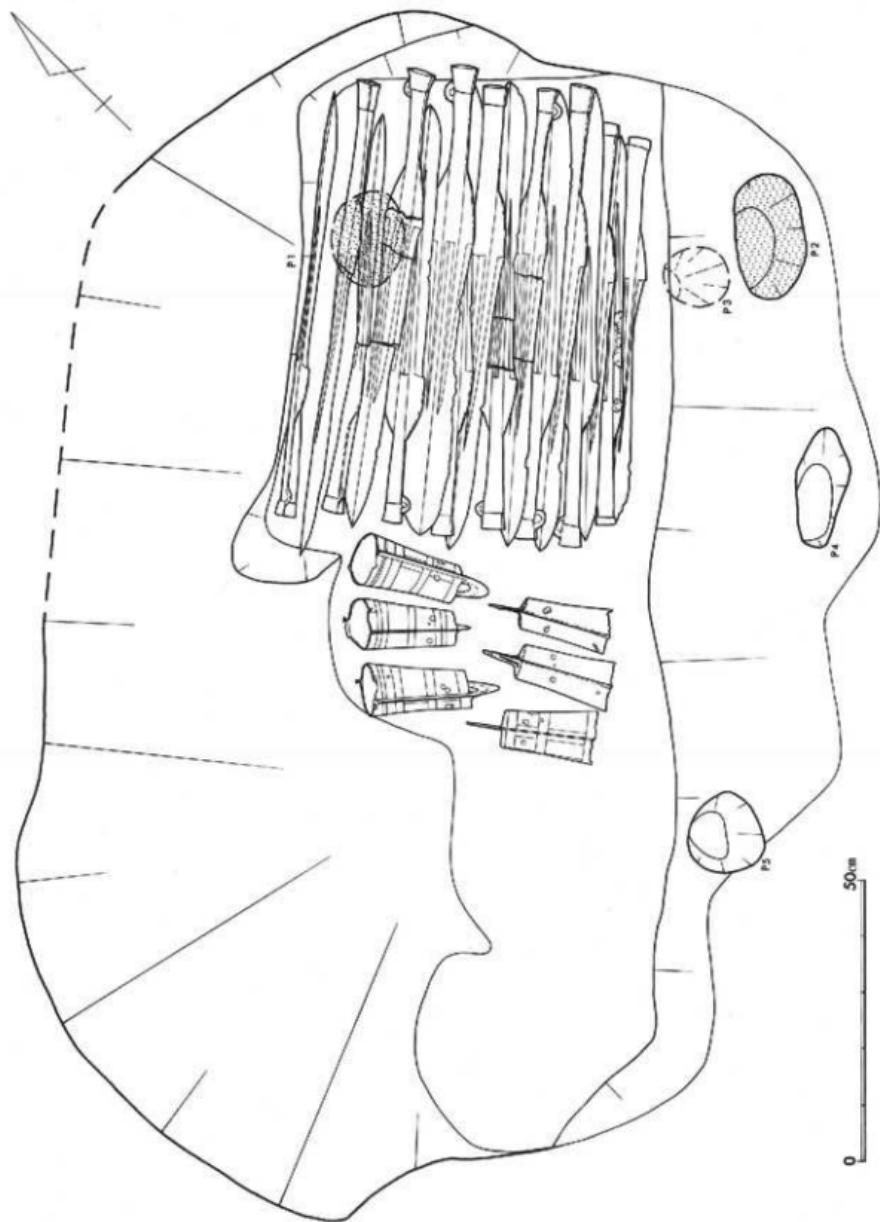
図版 2



埋納坑埋土堆積状況

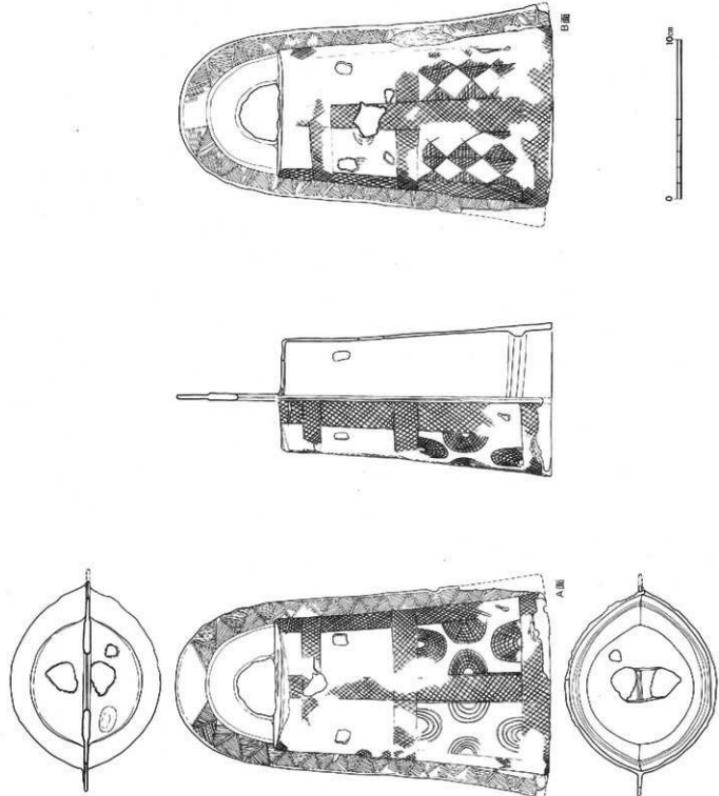
図版3





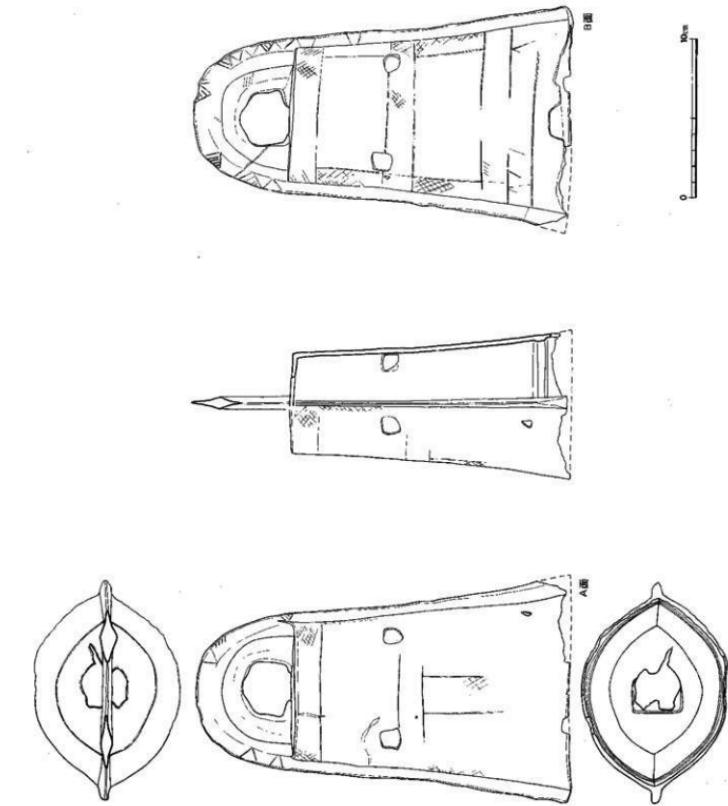
1分銅螺旋測図

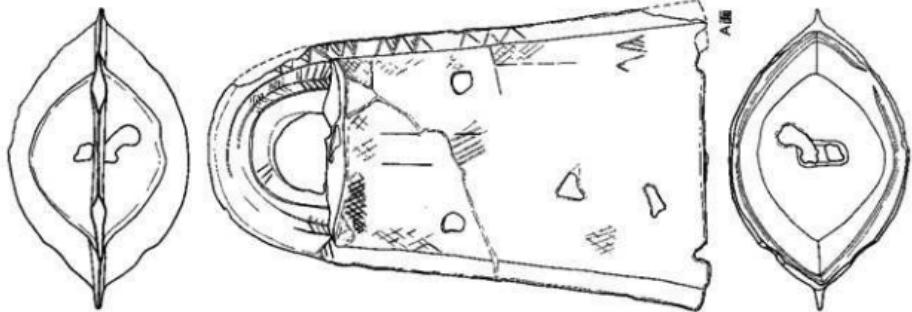
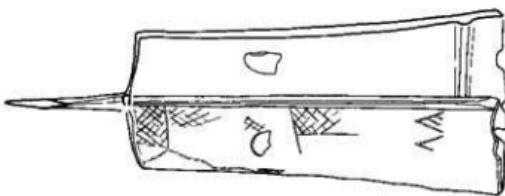
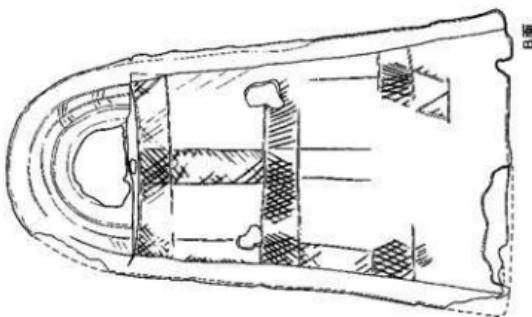
図版5



2号銅鐸尖測圖

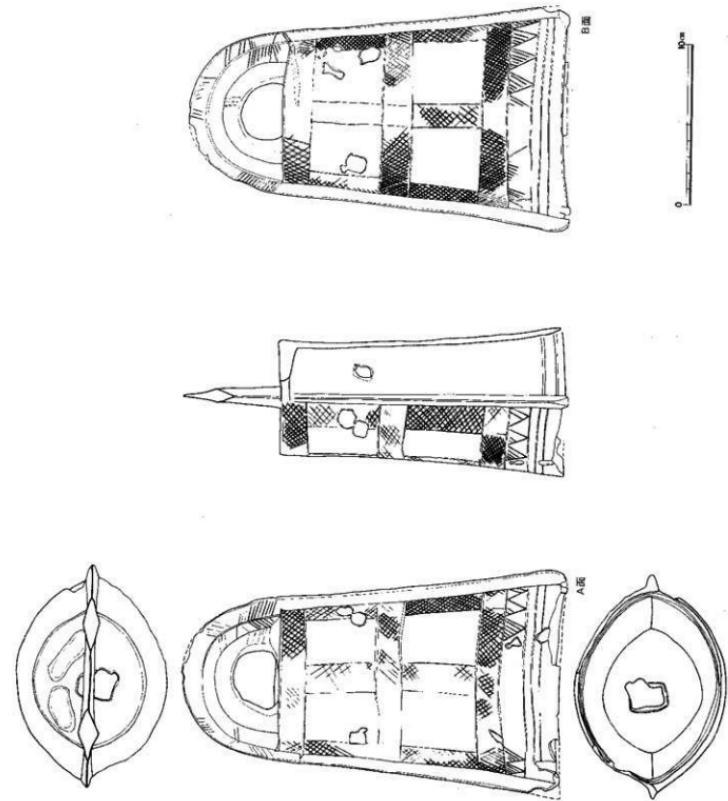
図版6





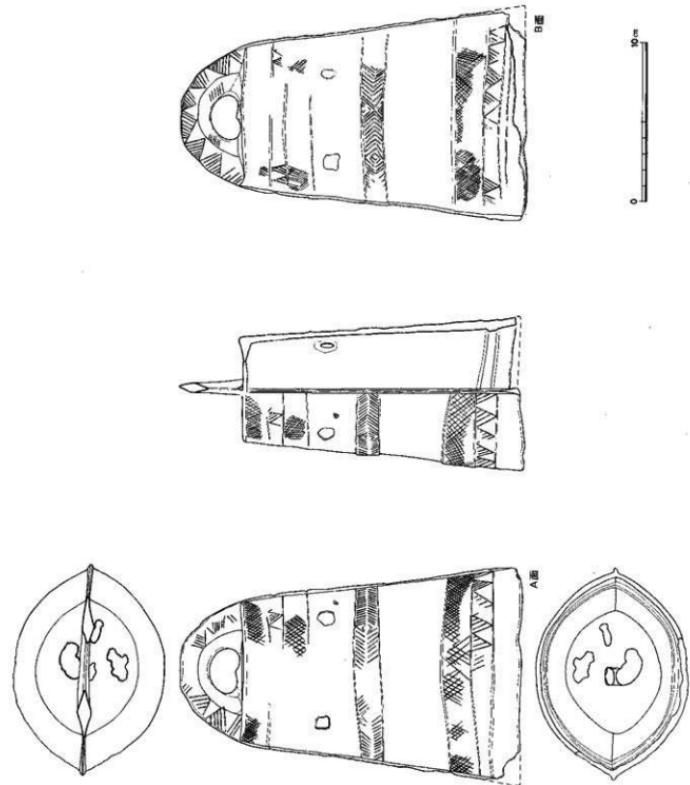
4号銅鐸実測図

図版8



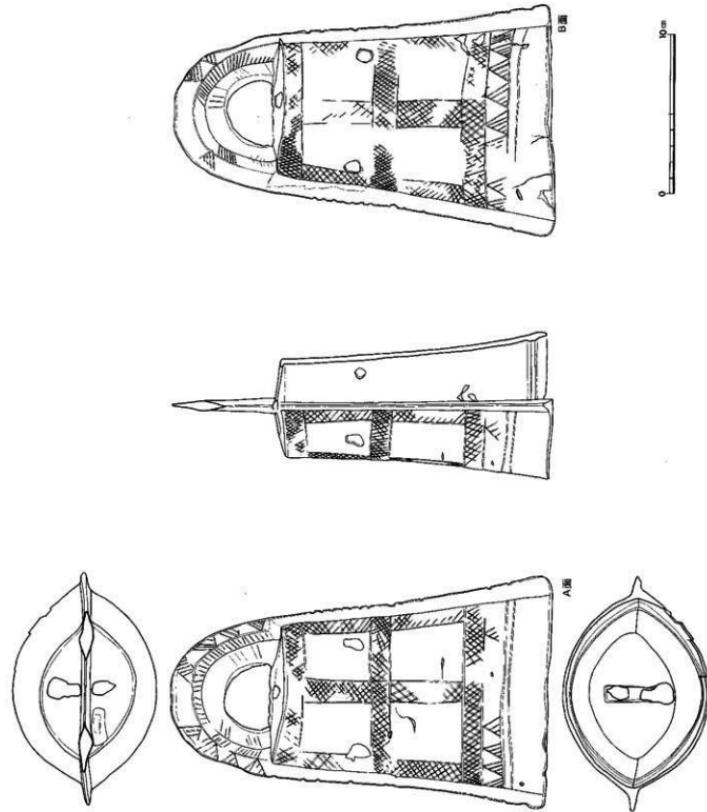
5号銅鐸実測図

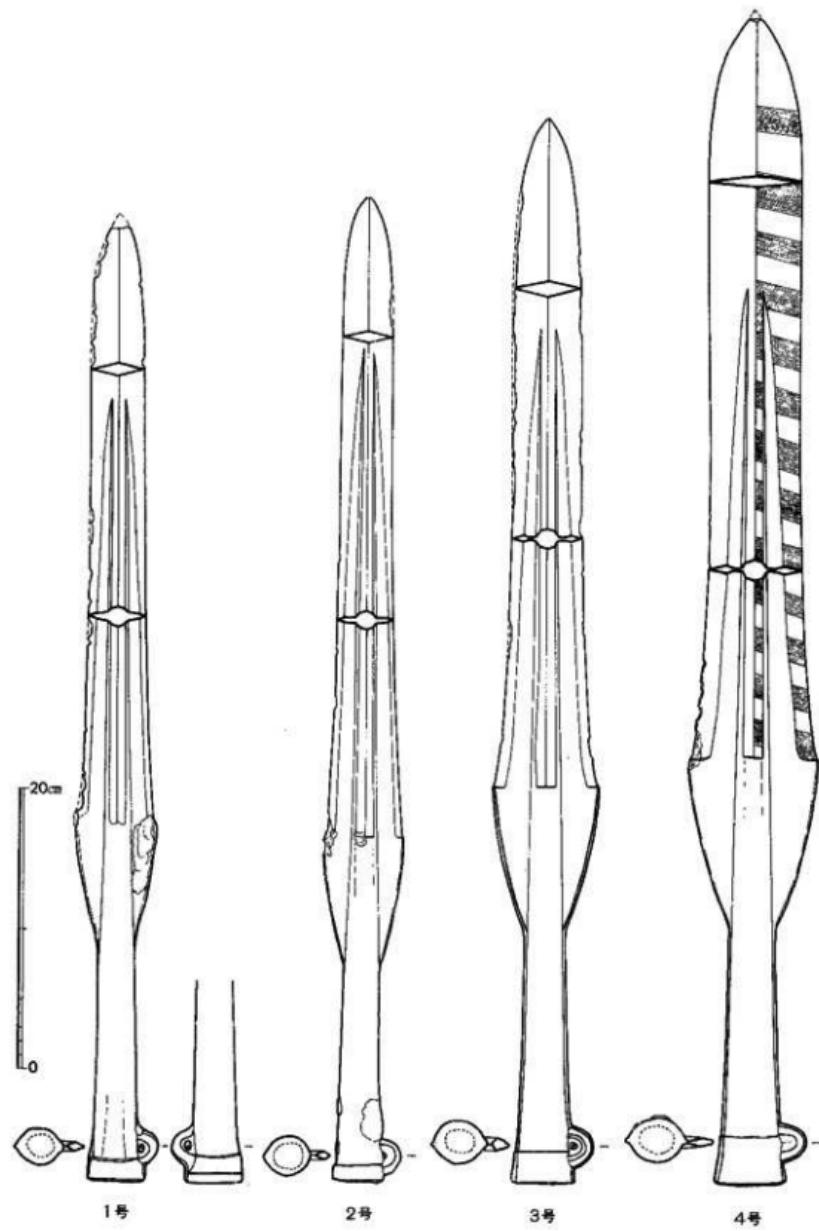
図版9

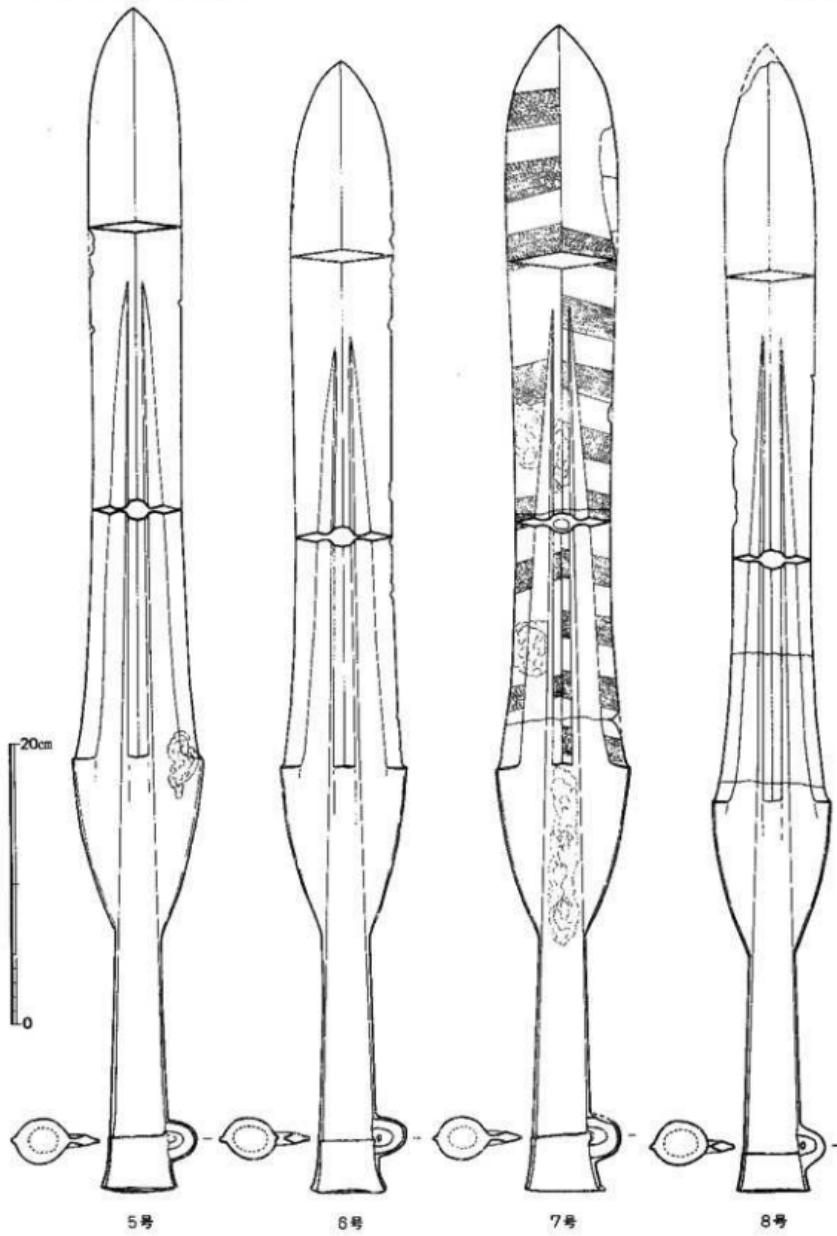


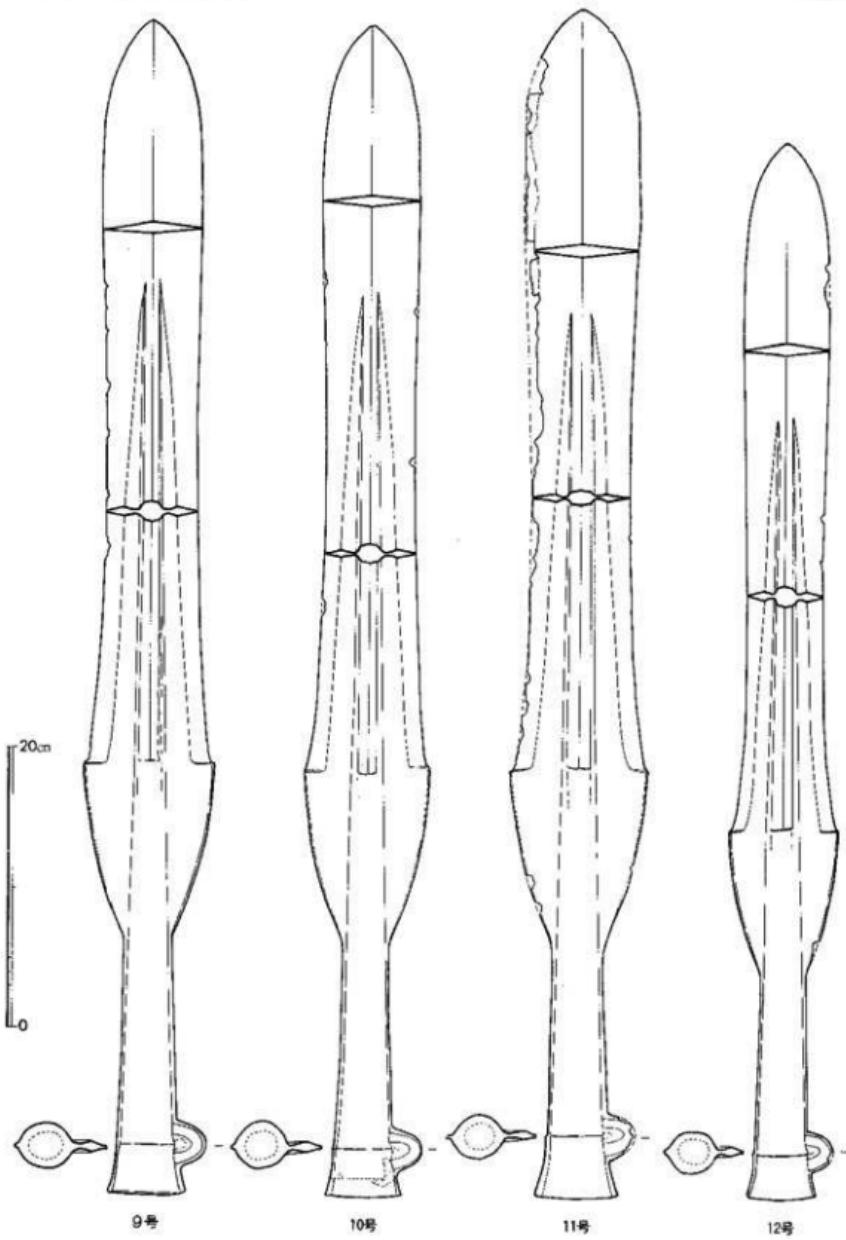
6号銅鐸実測図

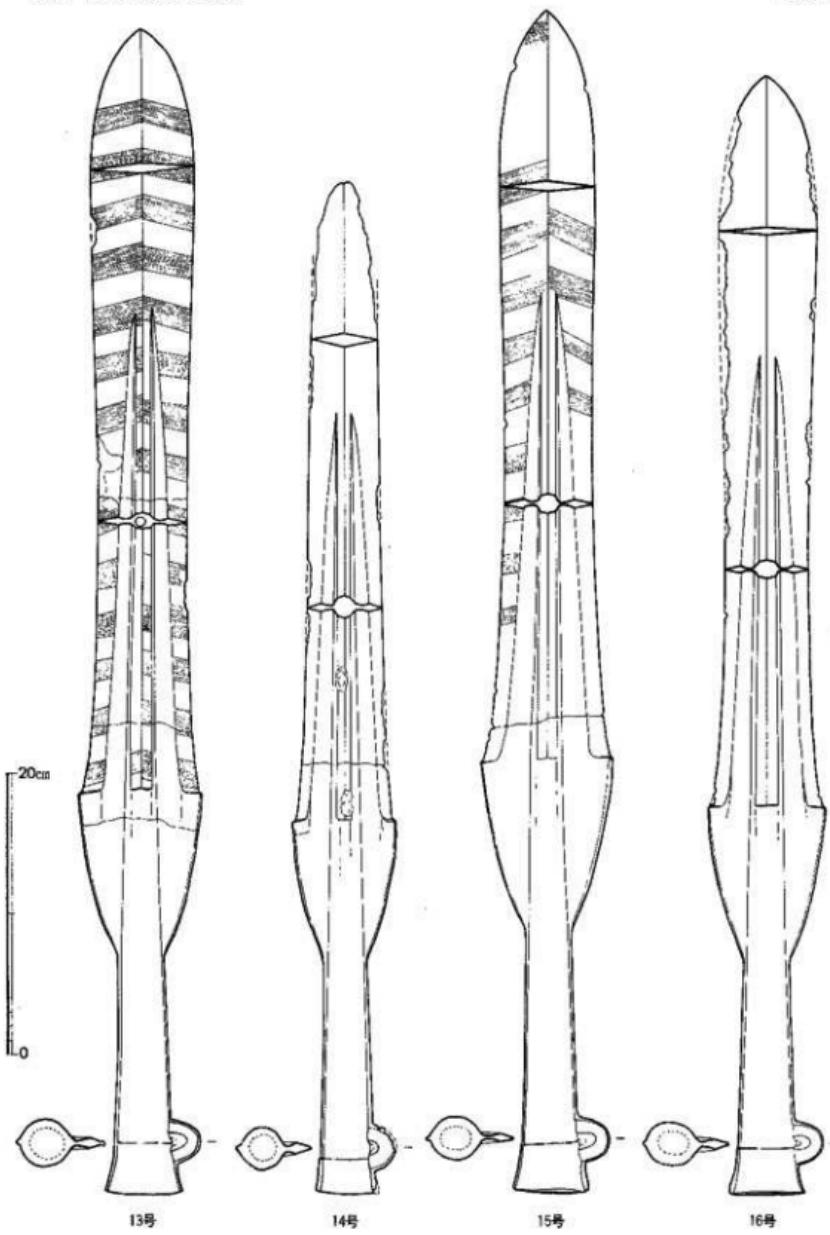
図版10













1 荒神谷遺跡遠景（仏経山より北東を望む）



2 荒神谷遺跡近景（西方上空から）



1 昭和60年度発掘調査前の状況（南から）



2 昭和60年度発掘調査後の状況（東から）



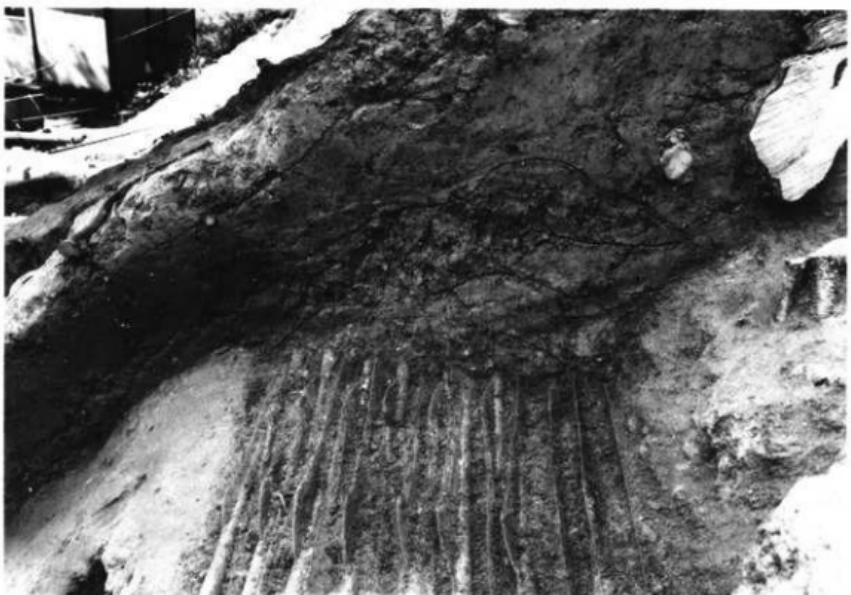
1 銅鐸出土時の状況（南から）



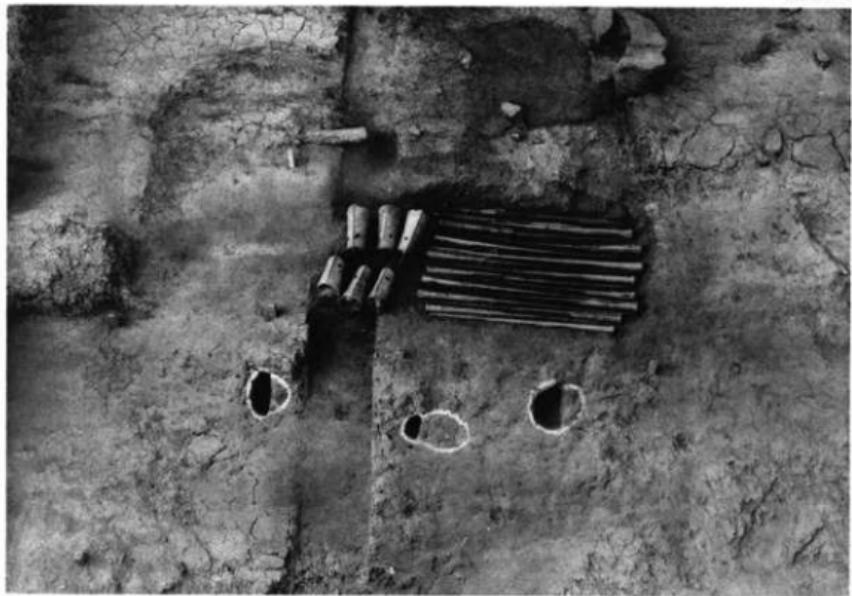
2 埋土検出状況（東から）



1 埋土調査時ピット検出状況（南から）



2 埋納坑埋土堆積状況（東から）



1 銅鐸・銅矛出土状況（南から）



2 銅鐸・銅矛出土状況（西から）



1 銅鐸・銅矛取り上げ後の状況（東から）



2 埋納坑下部の粘質土堆積状況（南から）



銅剝離納坑(左)と銅鋣・銅矛埋納坑(右)の全景(合成写真)



1 1号銅鐸（左A面、右B面）



2 1号銅鐸A面（部分）



3 1号銅鐸B面（部分）



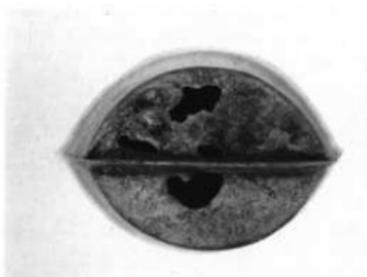
1 2号銅鐸（左A面、右B面）



2 3号銅鐸（左A面、右B面）



1 5号銅鐸（左A面、右B面）



2 5号銅鐸舞部



3 5号銅鐸底部



4 5号銅鐸B面（部分）



1 4号铜铎（左A面、右B面）



2 6号铜铎（左A面、右B面）

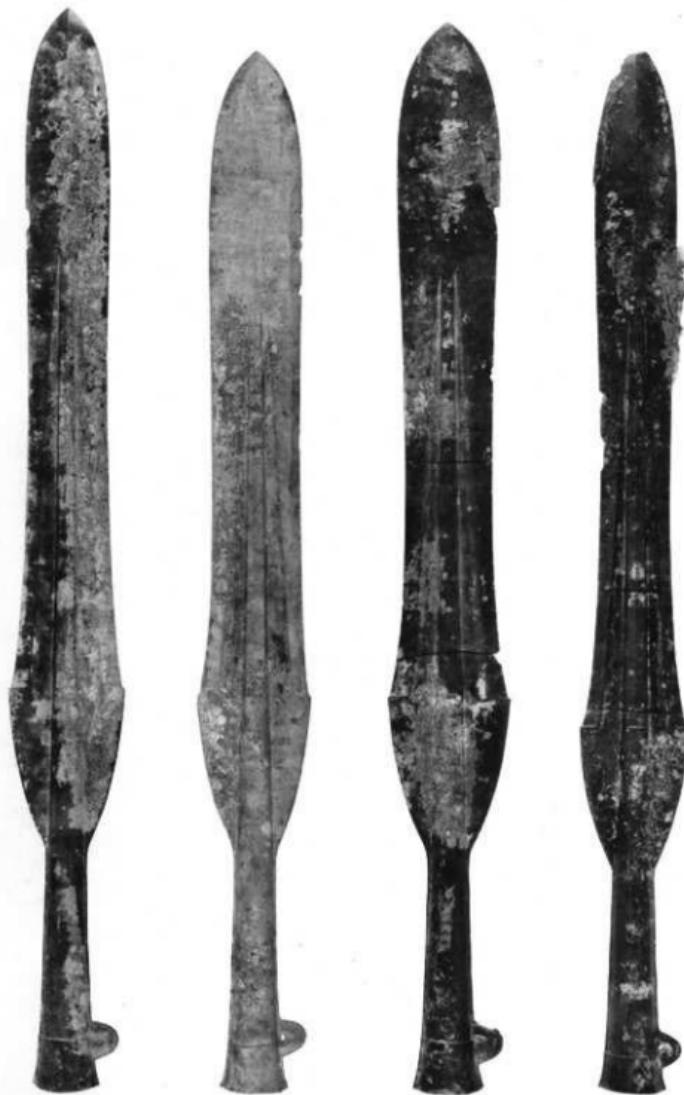


1号銅矛

2号銅矛

3号銅矛

4号銅矛



5号銅矛

6号銅矛

7号銅矛

8号銅矛



9号銅矛

10号銅矛

11号銅矛

12号銅矛



13号銅矛

14号銅矛

15号銅矛

16号銅矛

荒神谷遺跡発掘調査概報(2)
銅鐸・銅矛出土地

発行 昭和61年3月29日

編集 烏根県教育委員会
松江市城町1番地

印刷 (株)真陽社
京都市下京区油小路仏光寺上ル
